
風水メイド神記 第一部 青龍の杖編

かがみん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風水メイド神記 第一部 青龍の杖編

【Nコード】

N2543M

【作者名】

かがみん

【あらすじ】

東洋ファンタジー……なのでしょうか？

ヒロインは二十歳なのでロリ好きの方はおもしろくないかも……

序章（前書き）

このお話は、元々GREEのコミュニティで書いた作品で、原題は「風水メイド戦記」でしたが、似た名前のコミックがあったので、若干変更しました。

コンセプトは、でっかい杖を振り回して闘う美少女メイドというものでした。

かなり前に書いたので文章は未熟であり、かなり読み辛く思いましたので、ちょびつとだけ加筆修正してます……が、あんまり変わりませんね（^ー^；）

さて、この物語は「ガルガンチュア」五部作の最初のシリーズで、他に外伝も予定。第二部はそのうち執筆する予定で、GREEに書いてから他のサイト上に載せる予定です。

なお、どうもバグなのか一部に文字化けする部分があるみたいです。ですが、どうすりゃいいか作者にはわかりません。ごめんなさい。

序章

西豪寺京一の寢覚めは、あまりよいものではなかった。

「ほら、ご主人様！さっさと起きろ！」

ボスッ！！

そのメイドさんは、いきなりベッドの上に脚を乗つけて、ぐいと踏み込んできた。

「ぐほうっ！！」

京一は、突然、腹にきた衝撃に、喚き声をあげた。

「あ、あの、二階堂さん…頼みますから、もう少し穏やかに起こしてもらえると……」

気弱に呟きながら、自分を起こしに来てくれたメイドさん
二階堂辰魅を見上げた。

気の強そうな娘である。

栗色のロングヘア。 少々つり上り気味の、アーモンド型の双眸。
桜色の唇。

なかなかの美人である。

おまけに胸がでかい。

そんな彼女は、純白のヒラヒラしたカチューシャと、エプロンに、長袖で、裾の長いスカートの濃紺のメイド服を着ている。

美しい……

思わずうつとり眺めていると。

「もお！なにぼつつとしてるの！？ さっさと起き上がりなさいよ」

ぐい、と京一の腕を掴んで、起き上がらせようとする辰魅。

(うわっ)

至近距離に、辰魅の顔がきて、ときどきする京一。
甘い、髪の手が鼻先を掠めていく。

「しっかりしなさい！！あなた、生徒会副会長でしょ、寝坊ばかりでどうするのー！」

「だって、僕は低血圧で……それに……」

「言い訳は聞かない！男ならビシッとしてよね！」

「は、はい……」

「さ、早く着替えて。朝ごはんは出来てるから……」

「うん。ごめんなさい」

情けない表情で、辰魅に言った。

そんな彼の様子に、ため息を吐いて、辰魅は「それじゃあたしは行くわね。まだ仕事があるんだから。京一くんもちゃんとガツコ行くんだよ?」

「わかってますよ。もうずる休みはしません」

「ったく、注射が怖いからって、学校休む高校生がどこにいるのよ。小学生じゃあるまいし…」

「ううっ」

縮こまる京一。

「全く、こんなのが跡取りなんて おじさまも大変ね」

そう言いながら、京一の部屋を出ていく辰魅。

名残惜しそうに、その姿を見ていた京一だったが、時計の針の進み具合を見ると、慌てて制服に着替え始めた。

「やばい！遅刻しちゃう」

遅刻したら、あの人に 生徒会長に起こられてしまう。

「怒られるのやだなあ…」

××××××××××

私立清流館高校。

西豪寺 京一は、リムジンで登校した。

西豪寺 コンツェルンの御曹司である彼にとっては、これが普通の登校なのだ。

清流館高校は都内有数のお

坊っちゃん、お嬢さま学校である。 みな家柄もよく裕福な家庭ばかりだ。 しかも容姿に優れた若者たちが多い。

京一も、見かけは非常に良かった。 線の細い整った顔立ち。 温和で優しい人となりは、それなりに人望を得ることに役立っている。

とはいえ

「西豪寺くん、もう会議は始まってますわよ」

「す、すいません、会長……」

どうにも頼りない性格が、周囲から信頼されない理由なのかもしれない。

やや遅れて生徒会室に入ってきた京一に、生徒会長の少女が柳眉を上げ、怒声をぶつけてきた。 京一としては謝るしかない。

「……今度から気をつけてくれますように」

生徒会長は情けない顔の副会長の見て、ふうとため息を吐いて言った。

「はい。すみません」

生徒会長 桜留おつじょうかのんは、やっぱりこの男はだめだな、と思った。

かのんは、美男美女の多いこの学校でも、とびきりの美少女だ。

長い艶やかな黒髪を、背中に下ろし、黒玉を思わせる瞳は、知的に澄んだ輝きを放つ。

長身、身のこなしが優雅で、すっきりとした印象を与えてくれる美貌の少女だ。

（もう少し堂々とした振る舞いをしてくれれば…もっと頼りにできますのに。顔は素敵なのですから、もっとときびきびとして欲しいですわね ）

内心そう思いながら、かのんは、

「それでは、メンバーが集まったところで、早朝会議を始めたいと思います 」

と、会議の開始を宣言し、生徒会の面々を見渡すのだった

一方。二階堂辰魅は。

「あゝ忙しい」

邸の洗濯と掃除に追われていた。

と。

「辰魅くん」

「あ、執事さん」

西豪寺家に仕える年輩の執事が、洗濯物を抱える辰魅に、声をかけてきた。

「実は頼みがあるんじゃが……」

「はい、なんですか？」

「わしは夕方、旦那様の言いつけがあつて、京一坊ちっやまの迎えが出来なくなつてもうたんじゃ」

「はあ……」

「たしか、辰魅くんは免許があつたね？」

「ええ、ありますが」

「それでは、悪いが坊っちやまの迎えをたのめんかの」

「わ、私ですか」

「そうじゃ。どうじやろう、たのめるかの」

「まあ、いいですけど。あたし夕方は買い出しが……」

「ならついでにいつてくるとよい。坊っちゃまなら別に怒りはせんじやるうて」

「まあ、京一くんなら文句は言わないだろうけど……」

「頼むよ、辰魅くん」

「はあ……まあ、いいですけど……」

あのリムジンをあたしが運転……本当にいいのかな……？ ぶつけても史らないわよ……

一抹の不安を抱える彼女に、老執事は感謝の言葉をかけ、足早に立ち去った。

「…おっと」

洗濯の最中だった。

慌てて辰魅は、衣服の山を抱えて、洗濯所に急いだ。

××××××××××

東京。

いや、正確には新東京と呼ぶべきか かの 大洪水 によって、すさまじい被害を蒙ったこの都市も、いまではすっかり盛時の勢いを取り戻した観がある。

その街を、オレンジ色の闇が、天上から覆いつつあった。

高級リムジンをかつ飛ばして、二階堂辰魅は、清流館高校へと向かっていった。

「ああ。なんかアタシ、セレブな気分……」

目指す高校に着いた彼女は、どうにか車をぶつける事なく、駐車場に止める。

「でっかい学校だな」

周囲を見回して、しきりに感心する。

「んじゃ。校門のそこ行つて、坊っちゃんを待つかしらね」

辰魅はメイド服のスカートを翻すと、珍しげに校舎を観察しながら、歩き出した。

「それにしても、これじゃあたしの行つてたガッコなんて、小さなテント小屋みたいなもんね……」

西日が窓から射してきて、京一の眸を灼^やいた。

「ご苦労様。ありがとう、西豪寺くん。手伝ってくれて……」

微笑しながら、桜留かのんが、お礼を言ってきた。

ここは生徒会室。

会長であるかのんには、放課後にも残つてやる仕事があった。京一

は副会長として、彼女の手伝いを申し出て、かのんもせっかくだからと、作業と一緒にしてもらっていた。

「いや、会長一人じゃ、大変な分量だったし」

書類の整理だったが、一人なら二時間以上かかっただろう。しかし、二人で力を合わせたおかげで、一時間程度で終わらせる事ができた。

「ありがとう」

と、かのんはもう一度、言った。

「それじゃ、僕は帰りますね。爺をだいぶ待たせてるから」

「お疲れさまでしたね。では、また明日、ごきげんよう」

部屋から去る少年の背に、かのんは別れの言葉をかける。

「……」

一人、室内に残るかのんの、口許には、嬉しそうな微笑みが浮かんでいた。

第一章 夕闇の疾走

「よおっ！いま帰りか？」

「一ノ瀬……か」
いちのせ

俊敏そうな体つきの少年が、学校の玄関先を出たばかりだった京一を、呼び止めてきた。

「生徒会のお仕事、ご苦労さん」

茶目つ気たつぷりに笑いかけるこの少年は、一ノ瀬 歩夢。あゆむ京一のクラスメートである。

彼は帰宅部だが、運動神経は抜群 京一の何倍もある なので、色んな運動部から助っ人の要請がくる。

「また、どこかのクラブの助っ人かい？」

「おう、野球部の練習試合にいつてきたぜ」

「君もこれから帰るのか？」

「そうだけど…一緒に帰るダチが遅いんだよな」

「なんだ。友達を待ってたのかい」

「そうさ。お前は確か、いつも迎えに来てもらってたよな？」

「うん。爺やが……」

「京一くん！」

その時、女性の声で呼ばれ、京一は軽く瞠目した。

「あれ…？」

白いエプロンに濃紺のメイド服。

長い髪の娘が、彼の姿を認めて駆け寄ってくる。

「に、二階堂さん…どうして」

「執事さんに頼まれたの。急用ができたから、かわりに京一くんを迎えに行ってくれて頼まれてね」

「そうなんですか…」

「お、おい。西豪寺、この人は？」

「家で住み込みのメイドをやっている、二階堂辰魅さんだよ」

「お友達？ よろしく…えっと」

「一ノ瀬歩夢です！ よろしくつす」

歩夢は、京一の首に腕を回して、

「畜生！　うらやましいなあ、西豪寺はよお、こんな綺麗なメイドさんと一つ屋根の下で　」

朗らかな笑顔を浮かべているが、その瞳には嫉妬と羨望の炎が燃えていた。

「くっ…苦しいよ……」

「あら、仲がいいのね」

「それはもう。俺たち大親友だもんな」

「……そうだね」

腕の締め付けから解放され、京一はぜいぜい喘いだ。

「くす。一ノ瀬くん。これからも京一ちゃんと仲良くしてやってね」

「もちろんですよ。そうだ。明日お前んち遊びに行くよ」

「ちょ…一ノ瀬…」

付き合いの長い京一は、歩夢の下心を嗅ぎとっている。

「あら、そうなの？　じゃお茶菓子買っておかなきゃ……」

「二階堂さん…」

京一には迷惑な話だったが、ここで拒否すると、後でうるさい。それに辰魅に器の小さい人間だと思われたくない。

「……楽しみに待ってるよ……」

「そうこなくっちゃな！ 親友」

心の中でため息を吐く京一であつた。

ところで、お金持ちの送迎といえば、ごついSPがぞろぞろついて歩く。そんなイメージがあるが、西豪寺家の場合は違っている。

京一はSPを連れて行くのを嫌っていた。四方を、いかにガードマンとはいえ、黒服の威圧的な集団に囲まれるのは正直落ちつかないし、精神的に疲れる。

だから、車の送り迎えは老執事の川崎重吉のみが行うことになった。ちなみに老人だが、実は彼は護身術の達人だという話だ。京一自体はその腕前を見たことはないが。

…それにしても。

（SPをつけてくれないよう頼んでよかった）

京一はリムジンの中で、喜んでいた。

（二階堂さんと二人つきり。夢みたいだな）

軽いデート気分を味わっている。

しかし。辰魅の方はそれどころではない。高級車をキズつけずに帰らなくてはならない。少なくとも、かすり傷一つでも、彼女の財産では修理費を賄えないだろう。

慎重にハンドルを握る。

「京一くん。悪いけど、途中で買い物によってもいいかしら？」

「良いですよ」

これで、二人っきりの時間が伸びたと喜ぶ。

訪れた商店街は、すでに濃い夕闇に包まれていた。

「悪いわね。荷物持ちみたいなことさせて……」

「構いません。僕は全然、気にしてませんから」

ますますデート気分が増すだけだと、京一は思った。

彼は楽しい時間を満喫しながら、憧れの女性に目を向ける。

「……」

買い物をしている辰魅の横顔を、京一はうつとりと見つめた。
可憐で。

強くて。

優しくて。

京一はいまのこの時間が、ずっと続けばいいのに、と願った。

だが……

騒動は突然にやって来るのだった…！

××××××××××

清流館高校。

桜留かのんが、生徒会室の窓のブラインドを下ろそうとした時。

「……」

窓の外。帰ろうとする西豪寺京一に近づいていく女性の姿が見えた。

「何故、ここに…？」

はっと、目を見開く。

薄暗い生徒会室に、一瞬、沈黙が流れる。

しかし、すぐにかのんの鋭い声が静寂を切り裂いた。

「わが剣よ」

かのんが、手を振る。

銀光を発して、一振りの長剣が手のなかに現れていた。

「わが契約に従いて

」

剣が複雑な幾何学紋様を描く。

魔方陣。

「わが従者。来たれ」

かのんは呪言を紡ぐ。

風が起こった。

光が弾け……

「我を召喚せしか、女王よ」

「お前には、任務の前にやらしてもらったことがあります」

「はっ。御意に」

「ゆけっ、黒き風よ……」

長剣を鳴らし、かのんは命じた。

「御意。魔王の血脈たる女王よ……!!」

黒い風が、部屋の窓を叩いて開き、外に飛び出していった。

「……」

かのは、暗い炎の宿る瞳で、夕陽差すの中を佇^{たたず}んでいた。

××××××××××

その頃。リムジンでは。

ドライブデート(?)が続いている。

運転する辰魅に、京一が学校で起こったことをしゃべっていた。

「京一くんって、その桜留さんという会長さんに、いっぱいお世話になってるのねえ」

彼女は、少々、呆れたように言った。

「はあ……」

藪蛇だったか……評価を下げてしまったか。京一は学校の話をしたのを後悔した。

「暗くなってきたわね」

辺りは夕闇に沈みつつあり、彼女としては事故らないよう、注意しなければいけない。

辰魅はヘッドライトをつけた。

夕闇のなか。昏い金色の光が、辰魅の姿を照らし出す。
神秘的な美貌だと、京一は思った。

人の絶えた道路を進む。

と。

「!？」

辰魅は、ヘッドミラーに映った影をみて、緊張した表情を一瞬、つくった。

（あれは…）

「まさかね」

その影はすぐに見えなくなった。

気のせいか……と、安心しかけたとき。

「ひよわ!？」

ガッン!

と、衝撃が、車体に来た。

「二階堂さん!」

「わわっ!」

ぎゃららるるっ!

危うく車はスリップしそうになった。

「うわぁ」

また、リムジンの後ろに、重たい衝撃が。

ぎゅろろぁあっ！

ビルに突っ込みそうになるのを、必死に回避した。

「二階堂さん、なにが……」

京一はあたふたと窓の外を見るが、なんの姿も確認できない。

「しっかりつかまってて！」

アクセルを踏んで叫ぶ。

スピードを上げる。

「ぬわっ」

その速さに京一はびっくりした。

「……」

サイドミラーに、黒いなにかが映る。

「うつ……」

辰魅は、冷たい汗を浮かべた。

（ 早く屋敷にたどり着けば……なんとかなる ）

なぜ、いまこのタイミングで、アレが飛来するのだ……！？

胸の中で、辰魅は毒づいた。

（とにかく、西豪寺邸に着けばこちらの勝ち ）

ハンドルを握る手に力がこもる。

「……一体、何が……」

「たちの悪いストーカーよ！」

「もしかして、僕を狙ってるの？」

「ええ！」

短く答えると、辰魅はリムジンの制御に集中した。今のままでは満足な力が発揮できない。不利な状況は変わらないが、諦めはしない。

そして、誓う。

この少年を守ると。

ガシャン！！

左のサイドミラーが、砕けた。

「……………」

辰魅は硝子が飛び散るのを横目に、アクセルを吹かす。

……連中め、アレが私だと気づいたのね？

だとしたら。

自分の闘いに、何も知らない京一を巻き込んでいることになる。

「悪魔め……………」

唇を噛む。

「あともう少しで屋敷だよ！」

京一は励ますように言った　その時。

ぐゴリッ……………！

天井が、巨大な槌で上から叩いたかのように、歪んでひしゃげた。

「なにかが上にいる！？」

京一は半泣きで口走った。

「…ち」

辰魅は舌打ちをした。

このままでは反撃もままならない。

（まいった）

敵は車の天井部分に貼りついているのか。 だとしたら、人間大に
実体化している？

（得物が欲しい）

痛切に願う。

トゥルル…

辰魅の携帯が鳴った。

ハンズフリーなので、ハンドリングの最中でも通話ができた。

「もしもし……」

辰魅はあらかじめ、イヤホンをセットしている。

『辰魅くんか！私だ』

低いバリトンが、彼女に呼び掛けた。

『いま、我々は奴等の反応を捕まえた！』

「いま、そいつがいますよ、頭の上に……京一くんも一緒です」

『……なんと』

相手は絶句したようだった。

『…』

いま彼がそちらに向かっている』

「ほんとですか!？」

ハンドル操作に余念のなかったメイドも、思わず眼を輝かせた。

「とはいえ、京一くんを巻き込むわけには参りません。とりあえず屋敷に逃げ込みます……」

『了解した。こちらもなるべく君をサポートする。とにかくもうしばらく頑張ってくれ』

「はい!」

通話が切れた。

「誰から？」

「…執事さんから。早く屋敷に逃げろって。相手はたちの悪いマフィアだそうよ」

「そ、そうなの？」

もちろん、嘘だ。

「飛ばすわよ！」

突っ走った。

……バシィ！ ダン！ バリィ！

天井の外から異様な音が聞こえてきて

（奴の気配が消えた……！）

彼がやってくれたのだろうか。

頷いて、辰魅はリムジンを疾走。橋を渡り、信号を越え、道を曲がり

「着いたっ！」

京一が歓声を上げた。

××××××××××

「まさか、あんなところで襲われるなんて……無事に屋敷に戻れてよかったわ」

辰魅は、メイド服のまま、寝台の上に横たわりながら、呟いていた。

『ホントだね。でも、この屋敷には多重の護法結界が張ってあるからね……いかに彼らでも屋敷に入れないし、僕たちの 気 を探知することも不可能だからね。ゆっくり休むといいよ』

辰魅は微笑んだ。

「そうね、リュウくん」

視線の先 窓際に、奇妙な物体が浮かんでいた。

青い色をした、ふかふかのぬいぐるみ。

それが宙に浮き、喋っている。

『彼は大丈夫？』

「京一くんなら、もう落ち着いてる。いま、食事の最中じゃないかしら？」

半壊したリムジンで屋敷に辿り着いたあと、怯える京一を落ち着かせて、入浴を促した辰魅は、そのまま自室に戻り、寝台に倒れこんだ。緊張したせいもあってかなり疲労していた。

「今日はリュウくんのおかげで助かったわ。ありがとう、リュウくん」

『君たちをサポートするのが僕の役目さ。“本体”が動けない以上、君たちに何とかしてもらえないからね』

「あゝあ、とんだ『聖宝』の守護者に選ばれたわね」

眉根をしかめて、辰魅はぼやいた。

『しかし、あれこそがいままでこの国を守ってきたんだよ。もし、あれが彼らの手に渡ったら』
も

「判ってる。あたしにだって、あれの大切さが……」

そう言った後、辰魅は立ち上がり、髪を整え、ずれたカチューシャを元に戻した。

「あいつら、まだ諦めてないでしょうね」

『当然だね。彼らはあれを喉から手が出るほど欲しがっている』

「なら、それを護るのが　あたし」

辰魅は、強い眼差しで、窓の外に広がる夜空を仰いだ。
あたかもそこに、敵がいるかのように

「　その前に……腹ごしらえを」

まだ夕食すら食べてない彼女だった。

プルルルル

電話が鳴ったのは、辰魅が部屋の扉を開けようとした、その瞬間であつた。

「……」

××××××××

ぼうつとした表情をしながら、京一は屋敷の廊下を歩いていた。

あの、夕べのドライブは、彼にかなりのショックを与えていたようで、あの時の光景が脳裏から離れないでいる。

しかし、身体を洗い、腹を満たした今では、屋敷に還ってきた時のような恐怖心は払拭されていた。

ただ何よりも忘れ難いことは……

屋敷に辿り着いた直後。怯えた少年を安心させるように。辰魅は京一をそっと、優しく、抱きしめてくれた。

それは、京一の頭が真っ白になった瞬間だった。

辰魅の胸の感触や、身体の柔らかさ、髪やメイド服から漂う甘い香り。

それら全てが、京一の思考から恐怖を洗い流したのである。かわりに訪れたのが、軽い羞恥心と、ときめき。

「もう、大丈夫だからね」

その声が、耳に残り続けた。

結果的には、彼は幸せな境地に至っている。

命を狙われたというのに、単純な男だな、と、自分でも思うが、ハッピーな気分には偽りはない。

と。

「あら、京一くん」

廊下の角から、辰魅が姿を現した。

「二階堂さん…！」

「どうしたの？ 顔が紅いけど……やっぱり、まだショックが抜けてない？」

「あ、いや、大丈夫です。……それより、二階堂さんこそ、どこへ？ お仕事ですか」

「んー、まあね。ちょっと用事」

「手伝いましょうか？」

苦笑して、辰魅は首を振る。

「いいわよ、別に……だいたい、あなたは私のご主人でしょ」

「正確には僕の、父の……ですよ」

「おじさまはめったに屋敷に帰ってこないし……だから、その時はあなたが主人よ」

京一の鼻先に人差し指をひょいと突き付け、悪戯っぽく笑う辰魅。

「でも僕は二階堂さんを……その、部下だと思ったことないですよ」

「あら、殊勝な坊っちゃまね。昨今のお子さまたちのわがままぶりとは違うじゃないの」

辰魅は、うふふと笑いながら、スカートを翻して京一とすれ違おうとする。

「じゃあ、私は行くわね。京一くん」

「は、はい……」

「私、あなたになら、部下って思われても構わないわよ……だから、なんでも命令していいわよ」

その冗談めかした言葉に、

（ドキン！）

京一の胸が高鳴った。

「そ、それはどういふ……」

京一の、辰魅の言の真意を問うた呼びかけは、しかし彼女には届かなかった。

小さな声を飲み込み、京一は辰魅の去った方をただ、呆然と立って見ている。

どきまぎした思いを抱えて、京一は自室に戻った。

×××××××××

辰魅はそつと、屋敷の庭に出た。広大な庭園だ。花壇や樹々が闇の中で静かに安らいでいる。

辰魅は、出勤を命ずる電話での連絡を、今更ながら思い出す。

それは、日本風水協会からの連絡であった。

そう。辰魅は、ある物を護るためにこれから戦いにいかねばならない。

「……リュウくん、奴の反応は？」

『保管庫に近づこうと狙ってるみたいだよ、……この街の上空を旋回してるね』

青いぬいぐるみが出現し、可愛い外見に反して、緊張した口調で彼が答えた。

「毎度、連中は諦めが悪いわね」

『千年以上も封じられてたんだからね……』

「全く……」

メイド服のフリルを風にそよがせ、辰魅は苦々しく呟いた。

「これも“仕事”かな」

リュウくんは彼女を促すように、言った。

『さあ 』

「……行きましょう」

辰魅は庭を横切り、塀に近づく。一瞬の跳躍で、塀を乗り越えた。

屋敷の正面から出ていって、門を守る守衛に見とがめられなくなかったからだ。

京一はもちろん、他のメイドや守衛たちにも彼女の秘密を知られるわけにはいかなかった。

それは、誰にも知られぬ神秘の戦い。

辰魅の副業（と言う言い方は、果たして正しいのかどうか）は、まさに人知を越えた次元にあるのだから

第二章 龍杖の主

『東京』の街を見下ろす高層ビルの屋上。

そこに、ほっそりとした人影が立っていた。美しい黒髪の娘だ。彼女は空を仰いでいた。

「今宵も月が綺麗ですわね……」

満月に照らされたその姿は

「月光は魔族の力を増す……」

黒と紫を基調とした、ローブに身を包んだ桜留かのんであった。学校の時とだいぶ雰囲気が変わっている。

厳しい、凜とした香気を発するのは同じだが、そこに妖艶な色が混ざっている。

強い風が、細くて赤いリボンを巻いた黒髪を激しくなびかせる。同時にローブもはためいた。

ローブの下には、動きやすいシャツにタイツという恰好である。黒革のブーツでコンクリートの上を踏みしめて立ち、手には長剣を握りしめる。

「上手くやれ……ゴギエル……」

星の冷たい輝きを浴びて、かのんは言った。

「！」

ぴくり、と彼女の眉が動く。

「来たか……」

かのんの瞳に、銀色の炎が揺らめいて灯った。

「『聖宝』の守護者。お前を、倒す」

×××××××××

「あたし、ろくに食べずに出てきちゃった」

辰魅はしまった、という表情で、呟いた。

『しょうがないよ、危急の時だもの』

リュウくんが肩を竦めていった。ぬいぐるみ体型の彼がやると妙な違和感があるな、と辰魅は思った。

「『仕事』がおわったら……大好きなハンバーガーを食べてやるんだから」

決意も新たに、辰魅は駆け出す。

夜の東京の、郊外を目指す。

暗い、路が伸びる先。

辰魅はリュウくんを促した。

「リュウくん！　お願い！」

『判ってる。転送するよ！』

風に、メイド服の裾が勢いよく、音をたてて広がった。

月夜に、辰魅の声が響く。

「さあ！　戦闘開始！！」

××××××××××

深山^{たにやま} 仙狼^{せんろう}は、窓から見える遠くのネオンの輝きを、じっと凝視していた。

彼は、白髪^{はくはつ}白髯^{はくぜん}の小柄な老人である。

古めかしい道教の徒が着る、ゆったりとした袖の服を着ていた。胸には太極図が色鮮やかに刺繍されている。

「御老体、辰魅くんはやって来てますかな？」

低い声が老人の背にかけられる。
振り向かずとも誰かはわかった。

「あの娘なら、今度もやってくれるじやろって……」

優しい口調で仙狼は応えた。

「そうですね　それも占術で？」

「いや、ワシはあの娘を信賴しとる……まさとし雅敏の子じゃからな」

「二階堂博士は、確かに立派な方だった……」

昔話を語るように。

懐かしい人の名を告げる。

「だが……あの人の娘をこれ以上危険な目に会わせてよいのか……
正直私は後悔していますよ」

「……さいごうじ西豪寺　けんざうろう剣三郎ともあるう男が、そのように弱気な発言をするとはのう」

振り返りながら、仙狼は揶揄するように言った。

壮年の偉丈夫が立っていた。

精悍な眼と、雄魁な体躯の持ち主である。

彼が日本有数のトップ企業体　西豪寺コンツェルンの総帥であり、
また、日本の政治を陰から支える　八人委員会　のメンバーでもあった。

「けんざうろう剣三郎……“杖”が選んだのじゃぞ、二階堂雅敏の娘を、な」

それを聞いたけんざうろう剣三郎は、やや困惑げな顔を見せた。

「　青龍の化身たる“杖”は自らの持ち主を選定する、ですか……」

「なぜ辰魅が“杖”の主人に選ばれたのかは、ワシにも、詳しくは判らんがな」

仙狼は、狭い室内に視線を向ける。

質素な調度品の置かれた、中華風の部屋だ。机が真ん中にあり、その上には、複雑な文字と記号が描かれた羅針盤のようなボードが設置されている。

風水盤。

仙狼の仕事道具である。

「あの娘に賭けるほかあるまい……いまは、な」

「わが組織から、全国にいる様々な人物に日本の護りを任せていますが」

「じゃが、“杖”が選んだのはあの娘なのじゃよ？」

「ですな……」

「神霊の加護が辰魅にはある。必ず“悪魔”どもの野望を挫いてくれる」

「私たちも全力でサポートしなければ」

「わかつとるよ、あの娘にだけ辛い思いはさせんよ。わが日本風水協会も力を注ぐ……それが“ガルガンチュア”との契約じゃからな」

それにしても、と、仙狼は意地悪っぽい口調で、剣三郎に

言った。

「前からやけにあの娘の事を心配しとるが……それは未来の娘じゃからか？」

「何を申されます？」

彼は呆れた目で老人を見た。

「お主、あの娘には優しいが、ご子息には鬼の様に厳しいからのう……」

「京一は、後継ぎですから、わが一族を率いる者としては当然のこととを……」

「その京一さんと辰魅じゃが……なかなか良い仲じゃと聞いとるが？」

「それは屋敷で一番、歳が近いからでしょう」

「二歳差じゃが、のう」

「息子は未だ頼りない奴です。辰魅くんに相応しい男ではありませんよ。彼女にはもっといい相手が他にいるはずです」

「やれやれ、結婚相手まで雇用主が見つけるか……ふはは」

「二階堂博士からの恩を考えればそれくらい」

「む？」

鋭い気が仙狼の眼に宿った。

「始まったか…」

“ガルガンチュア”の守護する戦いが……。

××××××××××

黒い風が、白亜の建物の周囲を、上空から旋回していた。

一見すると病院か、福祉センターのように見える外観だが。

「日本風水協会」

その本部であり、占術士たちの日本における束ね役を自任する団体であった。

東京の郊外に、ひっそりと佇む、^{たたず}その建物は、ある秘密を抱えている。

「厚い結界が我の風を阻むか」

さすがは、“聖宝”を秘匿している場所だ。

「だが　これはどうだ」

風は、具現化しようとした。

黒い風が一ヶ所に集まり、肉体を為す。

鴉の頭部に、筋肉質の肉体、背には大きな翼。鉤爪の生えた手を掲げる、異形の生き物が出来上がった。

「わが魔力のありつたけを、ぶつけてくれる！」

「はいはい、お痛はいけないわねえ」

「！ お前は……」

鴉の頭が振り向いた先に……。

「あんたにはここで、消滅してもらうわね」

ポニーテールの髪の少女が、巨大な“杖”をたずさえて、空を舞っていた。

××××××××××

話は数分前に遡る。

夜の街を駆けながら、辰魅はポケットから、小さな缶を取り出す。

掌にすっぽり収まるサイズの缶だ。

蓋ふたをスライドさせて、中から黄色いものを一個出した。

口に放り込む。

がりがりと、噛む。

「きたきたきた ! !」

辰魅は身体に力がみなぎるのを感じた。

『よし!』

リュウくんが、光を呼ぶ。

光は辰魅に絡みついていた。

辰魅の着ているメイド服が、一瞬、青い輝きの粒になって弾けとんだ。

瑞々しい裸体に、再び青い輝きが纏まとわれた時 彼女の姿は変わっていた。

メイド服なのは基本的に変わらないが、ディテールが違う。

宝玉のあしらわれた水色のカチューシャ。

鮮やかな蒼色のブラウスに、紅いリボンタイ。大きく膨らんだパフスリーブ。ふわり、と風を受ける純白のエプロンの、後ろで結んだリボンが柔らかに揺れた。

脚には紺色のタイツ。蒼くて長いスカートの裾と、腕に巻いたバンドには、白いフリルが取り巻いている。

髪はポニーテールに結われ、大きめのリボンで括られていた。

「完了！」

新しいメイド服を纏った辰魅の腕のなかに、巨大な物体が現れる。

異常なほど巨大なそれは　　杖というより『柱』と呼ぶ方が相応しいだろう。

全長は八メートルはあるだろうか。硬質なサファイアブルーの煌めきを秘めた杖の先は、荘厳な龍頭になっていた。東洋の龍の造作である。威厳と強大さを感じさせるデザインだ。

“杖”の太さは丸太の半分ほどか、片手で抱え込み、もう片手でグリップを掴む造りであった。

コードネーム　D・H・
通称、ドラクロネス龍杖。

『龍脈結合ON』

龍杖からぶおおおん……という吼えるような音が鳴り響いた。

「翔ぶわよ！」

辰魅は地面を蹴るや、宙に舞い上がった。

辰魅は軽々とした身のこなしで、夜の街を駆ける。いや、翔る。垂直のビルディングを駆け登り、屋上から屋上へと跳ぶ。その姿はさながら鴉天狗のようだった。

巨大な龍杖を苦もなく扱いながら、彼女は東京の郊外を目指した。そこには、日本風水協会の本部があるのだった。

白亜の壁に囲まれたその建物は、占術師たちのギルドであり、また、日本を密かに守る機関とも関係する組織の中枢であった。

その、地下には、“聖宝”なるものが嚴重に保護されている……

一度だけ、辰魅が見ることを許された“聖宝”……これを狙う「敵」がいる。

その「敵」の漆黒の気を感じとった辰魅は、脚を速める。そして、星澄める夜空に向かって跳んだ。

「全人類の敵！ 待つてなさい！」

凜々しく、叫びが響いたのだった。

××××××××××

「……貴様が、我々の邪魔をする魔法使いというのは」

「敵」である「悪魔」は、そう憎々しげに、言った。

悪魔　そう、辰魅たちはこの悪魔と呼ばれる異質な生命体と戦っているのだった。

鴉の頭部が、雄叫ぶ。

「ぐああはああ!!」

ゴーギエルは、風を起こした。

「あたしは、魔法使いじゃないわよ……」

悪魔の手に、うねる風が収束していく様を、辰魅は落ち着いた顔で見守る。

「食らえ! 乱風牙!」

ゴーギエルが、真空の大刀を降り下ろした。

目に捉えきれぬ鎌鼬が、辰魅に向かう。

辰魅は龍杖を掲げ、起動を設定。

龍杖ドラクロテスが唸る声とともに目覚める。

すでに龍脈と靈的接続コネクされた龍杖は、大地から膨大なエネルギーを汲み上げている。

蒼い龍頭が輝きを伴い、熱を帯びる。

「木行の気を克すは金行の気なり」

「……! 魔法使いのロッドか!」

ゴーギエルが巨杖を見た。

「金克木（金属は樹にうち克つ）！」

黄金の光が、鋭利な真空の刃から、辰魅を防御した。

「あたしは 風水使いよ！」

言いながら、龍杖を操作。巨大な杖を片手で横に振るう。

ギョーン！

先ほどの悪魔が放った鎌鼬より威力のある呪刃が、鴉の片翼を断ち切った。

「ぐぎやあああ！？」

ば、馬鹿な……人間にこのような魔力が？」

黒い血を吐きながら絶叫するゴーギエルの前で、辰魅は懷より缶を取り出す。

そして、缶から黄色い飴のようなものを出して、口中に放り込む。

「そ、それは……」

その問いには答えず、につ、と笑うのみ。

その飴のようなものこそ、神が人に与えたという甘露 すなわち“マナ”であった。靈気を高密度で凝縮させたそれは、人に高い生命力と靈力とを付与する。

かつて、彷徨するイスラエル民族を救った天よりの賜物だ。

辰魅はこの“マナ”を食らうことにより、通常人の何倍もの靈力と

体力を発揮できる。

「くっ」

悪魔は魔力を練り上げ、赤光を作り出す。

「うぐおお！」

辰魅は龍杖の攻撃モードを変更・選択する。

『水撃モードに変更』

「悪魔、とつとと、消えてもらっわ」

「ならぬ！ 女王の御為にも、必ず“聖宝”を奪うと誓ったのだ！」

「渡さないわよ……」

ドラクロテスを構えた。

青く蒼く、杖が光り輝く。

黒き風の悪魔　ゴーギエルは、未だに辰魅を、たかだか人間の小娘ではないかと侮っている。
誤算はその油断だ。

彼の魔力が黒炎と化して爆球を産み出す。

「小娘！」

「……水覇轟走」

水晶色の龍頭が、ぴたり、と悪魔に向けられる。

「食らうがいい！神をも灼く黒き焰を！」

燃える魔力が夜空に炸慄した。

「ぐはあああ！！」

辰魅は避けもせず　龍杖を起動。

「はああ！！」

射線を確保。悪魔に放つは青き力。
高密度に圧縮された水行の気を束ねた、水の鎗が、分裂しながら悪魔に四方から向かう。

「！？」

邪悪な焰を一瞬で浄化した水鎗は、空中に滞空するゴーギエルを串刺しにした。

「……あうぎやああああ！！？」

断末魔。

鴉の羽が、闇に飛び散った。

「悪魔は闇に還れ」

何の感情も含まぬ、辰魅の声。
風が、彼女の衣装を揺らす。
ゴーギエルの姿は消滅していた。

「これで今回は　！？」

辰魅の身体が、吹っ飛んだ。

「うああ！？」

辰魅は、ビルの外側面に叩きつけられていた。

第三章 魔族の女王

………しやあああんっ

破碎の高音と共に、辰魅の身体はビルの内部に転げ落ちた。

「がつ…！」

薄暗いオフィスの中。無人の、静寂。

「くっ 他に敵が……」

起き上がるうとしたその時だ。

「ぐああっ！？」

腹に重い衝撃が走る。

何者かに踏みつけられ、辰魅は息を肺から押し出された。

「………つゆあああっ…！」

首を動かし、敵の正体を見てやろうとした。

「あ、あん………た………は………っ！」

娘が一人。

辰魅の腹部に足を置き、立っていた。

「……はじめまして、ガルガンチュアの」

女の低音の声が聞こえた。

「魔法使いさん」

「悪魔か!？」

「我は」

長い黒髪を掻き揚げ、女は宣べた。

「魔王バアル・フェゴルの血を受け継ぐ者……」

「!」

「魔族の女王なり」

「……」

戦慄に、辰魅は四肢を震わせた。

「貴女には……ここで死んでもらう」

冷たい宣告を、魔王の末裔は下した。

「誰が……あんたに……殺られる……」

辰魅は未だ手放さずにいた龍杖を、起動しようとした。

「そうはいかない」

女　桜留かのは、長剣を、辰魅の喉元に突きつける。

「一撃であなたの喉は串刺しだ……先ほど、私の部下にしたように」

「……」

辰魅は迷う。

しかし。

「どうせ、殺すつもりでしょ……ならば」

にやり、と皓齒^{こうし}を見せる。

「　貴女は！」

怒りの声が初めてあがった。

剣が、辰魅の喉に刺さる、瞬間。

「焰撃モード！」

龍杖が唸る。

かのは、辰魅の腹から足をどけ、杖を踏み砕かんとした。

「焰麗礁颯!!」

紅き光が、オフィス空間に満たされる。

爆焰。

「魔法使いめ!!」

激昂するかのん。

二人の娘は、爆発点を挟んで飛びすさっていた。

ビルは真ん中が衝撃で吹っ飛び、積み木が崩れるが如く、上階が折れて落下し大破する。

幸いにも無人のビルであり、ガードマンは地下にいて助かった。彼は翌日、レスキュー隊に救助される事になる。

××××××××××

辰魅は龍杖を手に、ビルの向かいにあった工事現場の鉄筋に降り立つ。

かのんは、古いアパートの屋上に降った。

「やるではないか　この魔力は……」

「　魔王の子孫とはね……」

しばし。

空間を挟んで、両者は対峙する。

「なぜ、あんた達は“聖宝”を狙う？」

辰魅は問うた。

「我々の世界を造るためだ」

「なんですって」

「長らく封印されていた我々の苦悶を貴女は知るまい」

月夜に、冷たい風が吹き、流れていく。

かのんは、かつて『悪魔』たちが人々に文明を与えたことを語った。

「　日本で言えば、いわば悪魔は国津神にあたる存在。人間は魔の眷族による恩恵で、高度な社会を築いた……然るに」

人間は、彼らが邪悪な魔神なのだと気づき、神の力によって封印を施した。人間のいわば反逆に、悪魔は憤り、凄惨な戦いが起こったとされる。

結局、悪魔は魔王クラスから妖魔にいたるまで、墮地獄を神に宣告されたのだった。

「我らはいつか人間と神に復讐することを誓った。……世界を滅ぼして、な」

「……な」

「神の創造に係るこの世界を破壊することで、新世界への浄化が完了する」

「何を考えて」

「バアル・フェゴルは神の力を受け、動けない。故に私が魔神の指揮をとっている」

「あんたは人間なのに悪魔に荷担すると」

「我が血の半分は魔族なのだ」

辰魅は、拳を固めた。

「我々がこの国を手に入れるためには、ガルガンチュアの護る“聖宝”が必要なのだ」

かのんは風の中で、剣を構えた。

「さあ 始めようか……我らと ガルガンチュア、世界をどちらが支配するか、の戦いを。そして」

かのんの“気”が膨れ上がる。

「貴女を倒して、“聖宝”ムラクモをいただく」

「こんな場所で戦ったら……」
ちらり、と。眼下を覗きみる。

サイレンの音と人の叫びが耳に入ってきた。
倒壊したビルの周辺に、消防車や救急車、パトカーなどが群がりつつある。

騒ぎはだんだんと大きくなってきていた。

「死傷者が出るかもしれない」

危惧を抱いた辰魅は、

「こつちよ!」

かのんを誘うように、戦場を変えるため移動した。

翔ぶ。

「む……」

かのんは風を巻いて、辰魅を追う。

二人の女性が夜空を高速で飛翔する。

辰魅は人気のない森の上空に跳んだ。

そこは首都郊外に広がる森で、公園の一角を成していた。
ここなら

辰魅は龍杖の起動準備にかかった。

龍脈からエネルギーを汲み取る。それと、先の戦いで失った霊力と

体力を取り戻すため、“マナ”を噛む。

「鋼撃モード！」

金行の気を溜める。

かのんは木々の間を縫うように、こちらに翔けてきた。

「他の人間を巻き込みたくないとは、殊勝だな」

皮肉っぽく、かのんが言う。

「行くぞ」

かのんは、厳かに宣する。

「望むところ」

辰魅の語気はいささか荒く響いた。

「金驟霖斬！！！！」

龍杖を横薙ぎに一閃。

破壊の刃がかのん目掛けて翔ぶ。

「裁！」

かのんは長剣で以て、黄金の光刃を受け流した。

が。

「く……！ この腕の痺れは……」

何と重く速やかな一撃だ　　！

「危うく剣を落とすところだった……だが……！」

かのんは剣に魔力を籠めた。

「はああああ……！！！」

「仕掛けてくるか！」

それならば、あたしも。

辰魅は攻撃モードを変更する。

二人の呪者が選んだ力は、“火”の力。

火は破壊の力の象徴だ。

辰魅は素早く、南の方角に移った。

「はあああつ……！！」

二人の間合いを縮めるべく、かのんは幹を蹴って飛び出した。
瞬速で辰魅の前面に移動する。

「……な！？」

その懐に入ってしまったえば、すぐに巨杖を起動できまい。
かのんはするように計算した。

「食らえ！」

「くっ　　！」

剣刃を杖で受け止める辰魅。

巨杖は盾としても使える。

間合いを埋め、巨杖の機動力を殺いだかのんは、神速の動きで攻撃した。

「……はやっ……！？」

剣撃は回避するので手一杯だった。龍杖を起動するタイミングを掴み損ねたままだ。

斬撃が彼女のスカートに裂け目を造り、紺色の布が破けて純白のフリルが舞散っていった。

さらに。

「　　痛っ」

白い太腿に、一筋の赤い傷がついていた。

鮮血が肌を濡らす。

「風刃よ！」

巨杖のガードを掻い潜って、かのんの剣尖は辰魅の胸元を切り裂いた。

「！」

ボタンが弾け、右の胸元に真紅の痕を遺す。

「この服は防刃防弾性なのに……！」

辰魅の着込んでいるメイド服、これには、製造途中で口訣と呪紋とをあらかじめ織り込んでおり、衝撃や物理的ダメージに対する耐性が与えられている。

それが。

「ガルガンチュア 特注の服を易々と斬り裂くなんて……その剣、ただの剣じゃないわね」

「ふっ」

かのんは剣刃を掲げてみせた。

「この剣は、魔神の王が鍛えし武器だ。かつて バアル・フェゴルが天界の戦士に振るった、覇者の剣よ」

辰魅の額に汗の珠が浮いた。

「貴女を斬る！」

かのんが斬撃を射つ！

辰魅はかろうじて真空の刃を避けた。

代わりに樹が二、三本切断され、鈍い音と共に倒れた。

××××××××××

陰陽思想において 南方は“火”を司る方角である。

『焰撃モードにシフト 』

龍杖を構え、攻撃の隙をうかがう。

かのんは、長剣で火の呪紋シンルを描いていた。

正三角形の中心に、火星を表すシンボルと獣帯ソディアック・白羊宮アリエスの記号を刻印する。

虚空に赤い残光が飛び散った。

「躍れ！紅刃よ」
スカーレット・ブレード

かのんは下段から、一気に辰魅に向かって振り上げた。

赤焰の軌跡が、風水使いに飛ぶ。

辰魅は龍杖を起動。

「炎跋蹠烈！！！！」

蒼龍の顎が、光を放つ。

空間の一点で、炎が弾け、爆音を轟かせた。

互いの呪力がぶつかり合い、両者に膨大な熱と衝撃波が襲いかかってきた。

『……くっ』

二人は大きく飛びすさって、間合いを開け、対峙した。

しゅん！

（はっ！）

辰魅は咄嗟に龍杖を、真後ろに向けて突き出した。

ガシィ！！

「なっ！？」

辰魅の背後には、見知らぬ男が抜き手を打たんとしていた。その初撃を杖は阻んだが

「妖魔？」

赤い眼。土気色の皮膚。口から覗く鋭い牙。黒衣をまとった瘦身の男。

巨杖を男の手が掴んでいた。

「こいつは」

「私の召喚した下僕」

「妖魔の眷族？」

「ヴァンパイア 即ち吸血鬼よ。貴女には闇の住人にでもなってもらおう」

かのんの冷笑に、辰魅は激昂した。

「だ、誰が！」

「ウケケケケ !!!!!」

バンパイアは奇声を上げながら自由な方の拳でもって突いてきた。辰魅は杖を持たぬ左腕で拳撃を捌く。

そして、吸血鬼の男に膝蹴りを放った。

彼は衝撃を腹に食ら

い、やや後退する。さすがに杖も掴んでいられずに手を離れた。

「………… あああ！！」

一瞬の隙を突いてかのんが刃を見舞ってくる。

巨杖で防御を試みるが、刃は辰魅の身体に達して、無事だった方の胸元と白いエプロンとを裂いていた。エプロンの切れ端と紺色の布片が夜空に散って漂う。

傷を肉体に付けられることは免れたが、彼女の胸は純白の下着姿を曝けだした状態だ。

（このままじゃ埒があかない）

胸を手で隠しながら、必死で考える。

（龍杖を起動させなければ　でも……）

相手は、挟撃の態勢をつくりだしていた。

双方からの攻撃を完全に防御する自信はない。
だけど

「負けられない！」

辰魅は、“マナ”をひと欠片、口に放り込んだ。

「リュウくん！」

“マナ”の詰まった缶を、宙高く放り投げる。

「なんのマネだ!？」

「ゲゲゲ？」

辰魅の行動を警戒するかのんたちに構わず、彼女は叫ぶ。

「それを全部あげるから!……だから!！」

『判ってる!』

“リュウ” くんの声が夜の風を破って響いた。

「……………!?!」

かのんは信じられぬ光景を網膜に焼き付けることになる。

「頼んだからね！リュウくん」

辰魅は希望を信じて、龍杖を握る手に、力を籠めた。

いつの間にか、辰魅の周囲で赤い輝きが爆^はぜていた。

戦いの余波で散った火が、樹々に引火したのだ。
森の一部が燃えている。火勢は徐々に激しさを増し、焼き尽くそうとする。

そんな中。

「ムガアアア!?!」

吸血鬼は、突如現れたぬいぐるみの様な存在に、困惑の呻きを上げた。

ふわり、と浮く、丸っこい物体。

ドラゴンを模した愛嬌のある造型。

その手には、小さな缶が握られていた。

“マナ” の結晶の入った缶だ。

彼は、口を大きく開け、白く煌めく“マナ” のドロップをザァーと、その内へと流し込んだ。

「……これは!？」

さしもの冷静なかのんも、声を上げずにはいられなかった。

第四章 蒼き龍

××××××××××

少し大きめのデイベアほどのサイズだった体が、一瞬で膨れ上がった。

（なんだ……これは）

かのんは瞠目した。

眩しい、蒼光が彼女たちを包み込む様に、閃いた。

「あぁっ!!」

光に圧されて目を瞑ったかのんが、再び目を開いた時、その瞳に映ったのは

「な、なにいろ、これは……?」

巨大な龍が、天を舞っていた。

ぬいぐるみ等ではない、本物の龍が。

蒼い鱗と白い毛が体表を覆う。

“ふうおおおう……”

蒼い鱗体を持つ龍は、深く、吐息した。

「馬鹿な　こんな……」

呆然と呟く、かのんであった。

辰魅は笑みを浮かべ、己れの持つ巨杖を見た。
杖は微かに震えていた。

蒼い龍に反応し、共鳴を起こしている。

（　それもそのはず、だわ）

天空を泳ぐ龍は、吸血鬼に頸をもたげた。

「なんだ……この龍は。　ものすごい靈気を感じる……まるで、
これは　」

かのんは、戦慄を覚えた。

「　神……？」

「その通りよ」

不敵な辰魅の声に、かのんはハッとなった。

「どついう事だ……」

「リュウくん　いいえ、あの蒼龍こそ、古の四神として名高い東方の守護神なのだから……」

「な……!!」

まさか。

巨杖をかのに向けて、辰魅は語りだした。もはや、吸血鬼など恐れる心配はない。

そう、蒼龍が真の姿を見せた今なら

「風水において四方を司る四神のなかで、青龍は東を護る靈獣。彼は五年前、この地を護るために邪悪な鬼神と戦ったの。即ち」

「五年前…… 大洪水 か!？」

かのんは、忌まわしい記憶と共に、あの惨事を思い出した。

「そう 地上に封じられた悪しきマガツカミたちが蘇ったあの
大洪水の時よ。邪神からこの東のくに 日本を護るために、青
龍は戦ったの……」

（ 大洪水 の時に? そんな…… ）

かのんは唇を戦慄かせた。

××××××××××

全ては、二〇〇五年三月に起こった事がきっかけで始まった。

三月半ばの、春の訪れを感じさせる風の中。突如、世界各地の都市が　いや、村や町、田畑や森や丘もなにもかもが、波濤のなかに呑み込まれた。

すなわち、地球規模の洪水という事態が発生したのだ。

当時から、地球温暖化により南極の氷が溶け、海水の上昇によって東京をはじめとする都市が水没する可能性が、学者により懸念されていた。

だが、それにしてはこの洪水は異常であつた。南極の氷がこれほど早く溶けるとは思えず、また、その兆候もなかったのだ。

科学的な調査結果により、南極の氷は溶けていなかったと判明した。どこからともなく、大水が生まれ世界を覆つたのである。

まるで、異次元から水を汲みあげたかのような大水は、地球各地に凄まじい被害を蒙^蒙らせた。

日本は地震の被害に逢うことは度々あつた。しかしこのような洪水による災害は初めての経験であり、日本の主要地はほとんど水没していったのだ。僅かな数時間の間に……。

多くの犠牲を生んだ大水は　大洪水　として、人々の脳裏に刻み込まれた。忌まわしい災厄の記憶として。

「　大洪水　は、邪龍王リヴァイアサンの復活によるもの……」

かのんは、　大洪水　の生まれた原因を知悉していた。

「　そう。聖書に記された、神の創造した最強の生命体……それ

が何らかの原因で目覚め、あの大水が召喚されたの……まあ、再びリヴァイアサンは封印されたけどね」

邪龍王の再封印により、水は消滅した。

だが　その影響により、地球各地に封じられていた　タタリガミ　や　マガツガミ　が復活してしまった。水が退いた後の地上は、こうした“負”の存在により滅びに向かいつつあったのだ。

そして、世界中にいる全ての退魔師たちは、地球を護るためにこれらの“負”の神々と激しい戦いを繰り広げた。これを第二次　祓神　擾乱　という

「　我々もまた、その時に蘇った禍津神のひとつ……」

「青龍は私たちの為に力を貸してくれた。日本最強の禍津神　オオマガツヒノカミ　を封印したの。だけど、力を使い果たして眠りについた」

「　では、この龍は!？」

困惑したかのんが訊ねる。

辰魅は、静かに答えを言った。

「　彼は、青龍神の欠片なの」

「なっ……?」

「青龍のその鱗の一片が化したもの」

（……！？）

『いわば、分身だな』

青龍は口を開いた。低く豊かな声量が耳朵に響いた。

『私は本体の一部分だが、その意志と力を受け継いでいる』

「一欠片の鱗とはいえ、神の力を舐めないでね」

辰魅はにやりと、口許を吊り上げた。

「く……それ程の存在が……」

かのんは、神の姿を前に、たじろぐ姿勢を見せた。

だが！

「負けられぬ ガルガンチュア には！あなたたちを潰すま
では……！！」

かのんは剣に魔力を籠めた。

（私とて無下に倒されるわけにはいかぬ！）

かのんの脳裡に、幼い頃の記憶が蘇ってくる。

大洪水の記憶が。

××××××××××

その当時 桜留かのんは、まだ十三歳の無力な少女であつた。彼女は、桜留財閥の令嬢として、何一つ過不足のない生活をしていた。しかし あの日を境に、彼女の境遇は一変する。

あの日 かのんの父、桜留総司は 大洪水 の犠牲となり、歸らぬひととなつた……。かのんと母はかろうじて一命をとりとめ、救い出されたが、気付けば家も土地も財産も……愛する父も全て失つていた。母娘は父の旧知に引き取られ、一応の安定を得た……。しかし。大洪水 の被害の爪痕が、彼女に恵まれた暮らしを享受させなかつた。

母は娘を養育するため勤めに出た。後見人となつた男性はなるべく様々な便宜を図ってくれたが、以前の様な楽な暮らしは望むべくもなかつた。

この 大洪水 に対し、日本政府や国連は全く後手に回つていた。人知を越えた災害だつたとはいえ、彼らの 特に日本政府の対応はあまりにお粗末だつたのだ。

かのんはこのとき、大人の力を頼れない 頼るに値しないと見きりをつけた。

父をすら救つてくれなかつた国家に、かのんは不信と憎悪を抱いたのである。十三歳の少女には、「政府」は役にたため木偶にしか見えなかつたのだ。

かのかは後見人の庇護の下にぬくぬくと甘んじているつもりは毛頭なかった。

彼女は、人一倍勉強した結果、独力で都内有数の進学校 清流館高校に受かった。

そして三年間、常に学年トップの成績をキープしてきたのである。

内なる野望に到達するために。

そう、この国を自分の手で変えるために

『……そうだ、私は誓ったのだ。必ずこの国を変えてみせると！
自分の手で！』

燃える瞳で、天を仰いだ。

清流館に入学し、国権を左右する地位に就くのを望む彼女は、自ら率先して生徒会の役職に専心した。いわばハーサルだと、自分に言い聞かせて……。

成績の優秀さばかり目立つかのかだが、生徒会においては絶大な指導力を発揮し、二年、三年と連続で生徒会長に当選するなど、高い人望を示した。

一方で、峻厳な性格の彼女は、他人にも厳しい態度で接した。その言動には一つの隙もなく、遅滞もない。

周りの人々は、そんな彼女に、いつしか畏れを抱くようになっていた。そして、親しく近寄る者が皆無となり……気付けば一人ぼっち。

清楚で優雅。完璧な美しさを持つ孤高の女帝。

その姿を遠巻きに眺める者はいても、心を分かつ『朋友』はいなかった。

かのんには、「部下」や「クラスメート」はいても「友」はいない……その事実が、氷の如き心魂の少女にも、ふとした時に孤独を覚えさせた。

ひとを恋い慕い、求める心がある。

そんな彼女の前に現れたのが、かのんが二年生の時に生徒会に入ってきた、西豪寺京一であった。

京一は、学校で唯一、かのんに暖かな手を差し伸べてくれた少年だったのである。

非常にお人好しな京一は、誰にでも偏見を持たずに接した。

彼が生徒会の仕事を始めた頃。解らない事があると何かとかのんに訊いてきたものだった。

『先輩は何でもよく知ってるから……』

照れながら、かのんに話しかけてくれた。

（この男、私を畏れないのか？ 他の者の様に……）

母鶏の後ろをついて回るヒヨコのような京一に、初めは鬱陶しがっていたかのんだったが、純朴な京一と一緒に仕事をこなすうちに、次第に彼に惹かれていった。

権力を志向してきた少女の胸に、初めて“恋”が芽生えた瞬間だった……。

初めての恋心に戸惑いつつも、かのんは表面的には普段と変わりなく、京一に接した。

野望を邁進するのに忙しいからと、自らの恋を自制しようとすら考えた。

そして、『悪魔』が彼女を迎えにきたのは、秋が終わりを告げる頃だった。

××××××××××

深夜。学校の寮の自室で、机に向かいノートにペンを走らせていた時だ。

（？）

ふと、気配を後ろに感じて振り向いた先に、異形の影が立っていた。

「……！？」

悲鳴を飲み込み、彼女は表情を固まらせた。

山羊の頭と蹄を持ち、裸の女性の上半身に、毛深い獣の下半身。頭部の横から二本、角を生やし、額からは短い直立した角が伸びている。その角の先端は、ヘブライ語の「シン」の字に似た形をしていた。角は蒼白い炎を蠟燭の様に浮かび上がらせていた。

「化け」

「女王さまを迎えに参上いたしました」

「え？」

山羊は唐突に、人語を話した。

かのんは驚いた。

「な……何者なの？」

「私はレオナル。魔族の使いにして夜宴の主宰者」

恭しい口調でレオナルは答えた。

「貴女には、我が軍の指揮官となつていただく」

「私が？ どういう……」

困惑する少女に、

「貴女には、我が主君たるバアル・フェゴルの血が流れておりますれば」

「？」

「貴女は、魔王の血脈に連なる者ですよ」

「なんですって……私が、魔王の？」

これは悪い夢なのだろうか……だが、目の前にいる『悪魔』の姿は、あまりにもリアルイティが在りすぎた。

「七十二柱の魔神王のうち、バル・フェゴルは東方の海に封じられ、今は動きが取れませぬ。その為に貴女が我々の指揮官となってもらいます」

レオナールは腕をかのんに伸ばした。

「さあ、目覚めるのです！魔族の将として！」

カッ！！

山羊の額の角が、光を放つ。

「あああつ！？」

かのんは光の渦に飲み込まれた。

魔王の力が、いま覚醒する！

「これは、聖なる復讐なのです。神は我々を見下し、人間は我々から受けた恩恵を忘れ我らを封印した！裏切りも甚だしい行為だ！

……だが我々は今一度この世界に復活する機会を得ました。今こそ復讐の刻！！神々を打倒し、人間共をひれ伏させる。そう、我々が世界を変えるのですよ！！神に代わって！！」

「世界を…変える……」

「ええ、その通りです。神々の間違った教えを払拭し、我々による理想社会を建設するのです。この地上に！ そうすれば、貴女の夢も叶うのですよ」

「私の、夢……」

脳裏に、一人の少年の顔が浮かぶ。

「私には、世界を変える力が、あるというのね？」

「それこそ、貴女は魔王の力を受け継いでいますれば」

「力」

じつと、己の掌を見た。

何か。今まで感じた事のない脈動を、そこから感じた。

「……力」

「さあ、行きましようか。我等の塞へ」

「何をするの？」

「儀式です。 王位を継承する為の」

「連れて行って」

かのんは、即応する。

そして。彼女は悪魔たちによって戴冠式を挙げ、女王となった。

世界を変える。

その為には、 ガルガンチュア が日本風水協会に保管を託した“聖宝” ムラクモが必要であると判断したかのんは、部下の『悪魔』を刺客として指し使わせる。

その一方で、普通の高校生としても過ごしていた。

世界変革の野心を抱く彼女の胸に、唯一、淡い光を灯すものがあるとしたなら、それは京一と共有する時間だった。魔族の女王ではなく、一人の少女として生きていられたから。

彼に対しては、かのんは冷たい態度を取ってしまう場合が多かっただろう。

もう少し、親しく彼に話しかけられたら と、内心、忸怩たる思いでいた。

それなのに。

昨日のあの時。

京一が放課後も残って、彼女の仕事を手伝ってくれた後で、
会議室の窓からブラインド越しに見えた光景。

京一を迎えにきた、メイド服姿の女性。

少年は嬉しそうに、その女性に話しかけていた

（これが 嫉妬、か……）

胸中に沸き起こる感情。黒く昏い魂の炎。

（魔法使い　　）

かのんは、狂気ともつかぬ情動に突き動かされて、二階堂 辰魅に
戦いを挑んだ

××××××××××

「貴女を倒してムラクモは貰う!!」

青龍を気にしつつも、かのんは剣を向けて辰魅に襲いかかる。
同時に、吸血鬼も攻撃の体勢をつくった。

『来るか!?!』

「グガアアア!」

眼を血走らせ、牙を剥き出した吸血鬼は、龍神に挑みかかっていった。

『……愚かな』

躍りかかる妖魔に、青龍は憐れみを込めて呟いた。

……ガッ!!

鉤爪の生えた手で、吸血鬼の拳撃を受け止める。

「ハギヤアアア!？」

龍はそのまま、掌中に妖魔を包み込む。

巨人に捕まったガリバーよろしく、吸血鬼は苦しみもがいた。

「ゲゲエエ!？」

ぐしゃあっ!

吸血鬼の身体はいとも容易く握り潰され、四散した。

その、欠片は、黒い粒子と化して空間に霧消してしまうのだった。

「“聖宝”を何に使うつもりよ？」

「封印された七十二柱の魔神王を甦らせるためだ!!」

ギンッ！！

剣と杖が激しく火花を散らした。

第五章 乱流

「聖宝」ムラクモは、かつて神武天皇が日本を支配する為に用いた、神々の遺産！その力はあらゆる呪力をも跳ね返し、解呪する。そして如何なる神をも斬り臥せる……このムラクモがあれば魔王を呪縛する封印を除く事が可能となる！！」

ギョバツ！

かのんは風の刃を撃つ。

巨杖でそれを受け止める辰魅。

「そんな理由では、尚更、渡せないわね！」

「貴女を倒せば問題ない！！」

かのんは爆焰を産み出し、辰魅に対して、弾丸の様に射ち出した。

ファイアー・ブリット
「焰矢！！」

『水行の気よ！』

水克火。

青白い光が、結界となって、辰魅を防御する。

「くっ……だが！」

例えこの命を燃やし尽くそうとも、ガルガンチュア とそれを援

助する政府とを滅ぼすと、誓ったのだ！」

「ガルガンチュア をなぜそこまで憎悪するの？」

「貴女たちは この国は、私の父を見殺しにしたから、だ……」

瞳に怒りの炎を宿して、かのんは答えた。

「貴女は、ガルガンチュア の成り立ちを知っているか？」

「まあ、一応耳にはしてるけど……」

かのんの問いに辰魅は答えた。

「大洪水 の時でしょ？ …… あまたのタタリガミを封じるために、日本にいた全ての呪者たちが結集して出来た組織が母体だって……」

かのんは首肯して、

「そう。元々は、天皇家に仕えた陰陽師の一派が中核となって、靈的に破壊されたこの国を建て直す事を目的に、ガルガンチュアは生まれた」

彼らは、災害によって混乱を極めた政治や経済の復興に手を貸し、さらに外部から日本に邪悪な影響を蒙らないように、日本全体を“神呪結界”で包み込み、守護とした。

「大洪水 の時だった…… ガルガンチュア は無能な政府の間ばかり救い、他に苦しんでいる人々を助けなかった。ガルガン

チュア は父をはじめとする一般の市民を見殺しにしたのだ！」

奥歯を噛んだ。

「所詮 ガルガンチュア は権勢に媚びた狗だ！ そのような狗共に、この国を支配させてたまるものか！！」

「……」

辰魅はかのんの糾弾を、黙って聞いていた。表情には、感情を表していない。

「私の父達を救う力を持っていながら、彼らはわざと無辜の民を見捨てたのだ！ そのような ガルガンチュア にこの国を指導する資格はない！」

「……それは違うわ」

「何！？」

「ガルガンチュア は救いたくても救えなかった……」

辰魅は静かに歩きだした。

「う」

かのんは向かってくる辰魅に、後退りする。一步一步、距離を詰めるようにする辰魅。

「タタリガミを封じるのに精一杯で、ガルガンチュア には人々

を助ける余裕がなかったの」

「戯れ言を！」

剣を握る手に力をこめる。

「　　本当よ」

「何が……」

辰魅はかのんの正面に向かい合う形で、対峙した。

「私は 祓神浄乱 に参加した人に聞いたのよ？ あんたは悪魔に騙されているだけだわ……」

「こ、これ以上は問答無用！」

動揺しつつ、かのんは、剣を振り上げ叫んだ。

「貴女を倒して“聖宝ムラクモ”を手に入れる！　そして、この国を私の手で変えるのよ……！」

「　　駄々っ子ね」

ひゅっ、と

「！？」

風が鳴った。

パァン！と、乾いた音が、響いた。

（な……）

××××××××××

赤く燃える火炎が、徐々に、森の木々を焼いていく。

（いかな……）

青龍は咆哮した。

水の“気”を呼ぶ声だ。

するとどうだろう。

蒼く美しい煌めきが、森の樹枝をとりまいていくではないか。
蒼く清爽な風が、赤熱の力を退けていく。

凄まじい水蒸気が発生し。

冷たい色の輝煌が消えたあと、森を焼かんとしていた炎は、全て鎮火していた。

（！？）

突如、青龍の体から、白煙が噴き出す。

……ゆぼんっ！！

白い爆発が起こったかと思うと、巨大な龍神の姿は無くなっていた。
青いヌイグルミに戻っている。

（靈力が切れたか　　）

“リュウ” くんに戻った彼は慌てて、戦場を見渡す。

（辰魅ちゃんは！）

××××××××××××

二人の少女が緊迫した空気の中で、ある動きを造り出していた。
平手一閃。

じいんと、熱くなった頬を片手で押さえ、かのんは呆然とメイド服
姿の女性を見た。

「何処のお嬢様かは知らないけど……甘ったれるんじゃないわ
よ！」

「……わ、私は　　」

「お父さんが亡くなって悲しむのは判るわ。だけどね　　」

ゆらり。巨杖を動かす。

「あの時に、家族を喪ったのは、あんただけじゃないのよ!」

ドガアッ!!

「ぐはあっ!？」

旋風が巻き起こった。

龍杖が、かのんの腹部を打つ!!

「あああああっつ!!」

打撃で吹っ飛んだかのんは、後ろから巨木に衝突した。
鮮血を吐き散らす。

「ぐう……」

片膝をつき、かのんは顔を上げた。
仁王立ちになる辰魅の眼に、激しい感情が揺らめいていた。

「あたしだって……あたしだって!」

「……」

血の滲む唇を噛み締めるかのん。

「あたしの父さんだって、大洪水で命を落としたわ! 無力な子供だったあたしに、救う手ではなかった……あんたと同じように、ね」

「……」

「だけど、ね。あんたみたいに誰かを逆恨みしてテロ紛いの事をするなんてなかったわよ。少なくとも“悪魔”と手を組む程、ひねくれてなかったわね」

ヴウンツッ！！！！！

巨杖が唸る。^{うな}

起動準備。

「悪魔も世界を滅ぼすタタリガミなのだから あんたも人類の敵なワケ。 倒すのに、躊躇はしないつもりよ」

水晶の龍頭が、淡く光を放つ。

「それはこちらの」

立ち上がり、長剣に魔力を集中させる。覇者の刃が、紫の光に包まれる。

「台詞だ！」

地を蹴った。

かのんの黒髪が、軍旗の如く靡いていった。

ファンク・ブリット
「風牙烈刃！！」

複雑なエノク文字の紋様が、剣刃に輝く。
魔剣を一動作で振り抜いた。

辰魅は怯まず前進。

「破あぁっ！！」

拳を握る。

壁をぶち抜くかの様に、紫光の力に突き立てる。
打音。

砕け散る紫の光。

「馬鹿な！」

光を蹴散らし、さらに前に進む。

龍杖を前方に向けながら、かのんに向かって駆ける。

キュオオオオンツッ！！

龍杖が高音の鳴き声を発する。

『臨界制御機構・完全解除にシフト』

リミッター・オフ。

かつてない力が、杖を震わせる。

音速の初撃。

辰魅はすべての“気”を巨杖に収束させる。

天地にあまねく陰陽の気よ。昊天上帝の命を奉じて我は邪なる

法を滅する利器たらん。闇を伐つ神力と成れ

ドラクロテスが咆哮した。

「龍声雷牙！！！！」

閃光が、全ての視界を奪う。

ぎゅううんっ！！

「うあああっ！」

「きゃああっ！」

辰魅は反動で後ろに吹っ飛ばされる。そのまま樹の枝葉のなかに埋もれてしまった。

そして。

××××××××××

「一つ、未だ分からない事があるのですが」

彼は、仙狼に疑問をぶつけた。

「ふむ、なにかね」

「どうして、辰魅くんが龍杖の主に選ばれたのか、という事です」

「その事が」

仙狼はゆっくりと、髭を撫でながら頷いた。

「先話を蒸し返すようで恐縮ですが……」

剣三郎は、腕を組んで話した。

「彼女の父は、確かに ガルガンチュア の結成を成し遂げた英雄です。が、辰魅くんはごく普通の娘だったはず……」

「龍杖を構成する『コア』 青龍の鱗を元にその主を探すための八卦を行ったが 詳しい理由は僕にも不明なのは、さっき言った通りじゃが…まあこれは僕の推測じゃがな」

「はい」

「おそらくは、血であろう」

「血、ですか？」

「うむ」

老人は頷く。

「この国の呪者の能力の如何は、血統に左右される事が多い」

二階堂 辰魅の遠祖に、龍神の祭司がいた可能性は充分に考えられる話だ。青龍神が選ぶのは、それなりに資格を有する者のはず。二

階堂家の血には、古い巫女の力が眠っていたのかもしれない。

「僕は八卦見で杖の主を探し出ただけじゃよ。本当のところは“杖”自身にでも訊かなければ判るまい。じゃがな　あの娘が“杖”に触れるまで全く霊的な力を持っていなかったのを考えるとなあ」

「辰魅くんが風水使いとして開眼したのは、龍杖と出会ってから、でしたな」

剣三郎は、改めて辰魅の秘めたる宿縁に思いをはせた。

「む」

突然、仙狼が、弾かれたように、窓の外に強い視線を向ける。

「これは」

「ご老体？」

「何と強大な“気”じゃ！　　雷を束ねるミズチの力！！」
いかづち

青白い爆光が窓から射し込み、全てを圧して輝いた。

ドガアアアツツ！！！！！！

遠くより、落雷の如き轟音が耳に響いた。

「おおっ……」

「これは！？」

悪魔との戦いで

「辰魅くんは……」

焦燥感の混ざった声で、剣三郎は呟いていた。

××××××××××

空間を貫く、プラズマの奔流。

龍

龍 龍

(いっ)

鮮青の雷光をまとわりつかせ、かのんに向かって一直線に放たれる。

「バアル・フェゴルの御名において」

かのんは腕を伸ばし、結界を張ろうと試みた。

「加護あれかし！」

かざした手から、防御障壁を造り出す。

ぐがぁぁあー!!

「あうっ！」

結界を割り、まさに龍の牙の様に光はかのんの腕を討つ！

「ぐああー!!」

ベキッ……ゴキッ……！

腕に激痛。

魔力を収束させたものの、霧散してしまう。さらに、腕の骨を粉碎され皮膚を焼かれた。その威力に、かのんの手は容易く破壊される。

かのんは光に抵抗することも出来ず、押されて弾かれた。

身体が浮き、夜空に光ごと飛ばされる。

「ぐっ!!」

吐血。光は胸に凄まじい圧力を与えた。雷の牙が彼女の体を咬み砕かんと暴れる。

「うわあっ」

胸に光が食い込んだ。

「ぐああっ!!」

血が、夜空に散る。
魔力が 消える。

（私は死ぬのか……目的も果たせずに……西豪寺……くん……）

そう、思ったとき。

「女王よ！」

横から、何者かが、彼女の体を抱えて光から庇った。

「レオナール！！」

魔界の使者が、かのんを庇い、光に射たれた。

「ぐがあ」

プラズマの光牙が、悪魔の背を貫く。

黒血が吹き出した。

ズンッ！！

「アアアアア　！？」

山羊の頭を持つ悪魔が、絶叫する。肉を裂き、かのんの脇腹を抉^{えぐ}つて、蒼光は天高く昇っていった。

空中でよろめき、失墜していくふたつの影。

「お前……なぜ……？」

「あ……貴女は」

レオナールはくぐもった声で、告げる。

「我々の希望なのです……女王……ぐあっ！」

その、肉体が、細かい塵と化して飛散していく。

「神を……倒す……希望……死なせは……し……な……」

レオナールの傷から、炎が噴き上がり、全身を燃やし尽くしていった。

「さらば、女王よ」

「レオナール！」

脇腹を押さえ、かのんは落ちていく。

その瞳に、彼女を魔界に導いた悪魔が消滅していく様が映る。

××××××××××

……流星のように。落下する、かのんの身体が、古い神社の境内に叩きつけられたと同時に。

夜空の彼方　星天の高みで新星もかくやと思われる光の爆発が、起こったのであった。

××××××××××

もう、身体は言う事を聞いてはくれない状態だった。

「はあはあ……はあはあ……ああ……」

森の木陰に見下ろされて、四肢を投げ出して二階堂 辰魅は横たわっていた。

荒い呼吸を絶え間なく続ける。

筋肉がびくびくと、痙攣するのが、まるで自分の身体でなくなったみたいに感じられた。

（どうにか、やつつけられたわね……）

あの、すさまじい熱量を持つ超攻熱気光弾を、易々と、防いだとは思われにくい。

例え助かったとして 相当のダメージを追わせたはず……。

もはや戦う力は残っていない。

体力、気力とも使い果たしたのである。

いま、この瞬間に攻撃を受ければ、全ては終りだ。

巨杖もまた、力を使い果たし、機能を停止させていた。

（オーバーロードしたのね……）

杖は、しゅうつつと、白い蒸気のような煙を各部から漂わせていた。

（眠りなさい、龍杖よ　　）

辰魅は瞳を閉じた。

……さああああ……と、涼風が吹き、火照った膚を優しく撫でていく。辰魅は、それを心地よく感じた。

（あーあ、ボロボロじゃないあたし……）

自分の姿の惨状を見て、へこんだ。

（カッコ悪い…これじゃ
彼に笑われちゃうわね。）

「　あの娘、たぶん、あの子の事を……」

星空に、頼りない少年の笑顔を重ね合わせる。

「大丈夫かい？」

そこへ、青いヌイグルミがやって来る。

「ええ。だけど、動けないわ。立ち上がるの、手伝ってもらえる？」

苦笑しながら、辰魅はリュウくんに言った。
彼は、倒れた辰魅の上に、短い手をかざす。

「その前に」

キラキラと、青白い蝶の鱗粉にも似た光る粒が、辰魅に降り注いだ。燐光に反応するかのように、光を浴びた破損したメイド服が、青光の粒子と化して消えていく。

夜空の下、美しい裸体を曝す辰魅は、未だ、呼吸が整わずに荒い息を吐き続けていた。

疲労感と脱力感が全身を支配している。

そして、巨杖も、その姿を霞^{かす}ませ、消滅した。

一瞬の後 戦闘用メイド服と入れ替わる様に、屋敷で着ていたメイド服に辰魅は覆われていた。
リュウくんの転送術によるものだ。

「さあ、帰ろう」

「一人じゃ無理。だからリュウくんに頼んだんじゃないの」

「判ってる」

霊力を用いて、辰魅の身体を持ち上げる。樹の幹に寄りかかる形で立ち上がる辰魅。

「協会に連絡しよ。車で運んでもらったほうがいいわ」

気だるい表情で言った。

もう、体に力が残っていない。

気がついてみれば、空腹感が完全に消えて、眠気だけがあった。

× × × × × × × × × ×

同じ頃。

傷つき、身体に力が入らなくなっているのは、なにも辰魅だけではなかった。

……神社の境内にめり込んだかのんは、痛みに神経を、打ち碎かれていた。

（全身打撲の上に肋骨が折れている……内蔵も出血多量だな）

片腕は完全に大破している。

敗北の味はあまりに苦すぎた。

かのんは、かろうじて動く左手の指を動かし、召喚の円を描いた。

「召喚に応え出でよわが従僕よ」

呪文詠唱。

「ギキッ！」

彼女が呼び出したのは、小さな人型の妖魔　インプであった。醜悪な顔に黒い無毛の皮膚、蝙蝠の羽を生やした小鬼である。それが二匹、現れた。

「来い」

倒れたままのかのんに、インプが一匹、無造作に近づいた。

「ギギイ!？」

そのインプの頸くびを、おもむろにかのんの手が掴む。

悲鳴を上げるインプを顧みず、かのんは指に力を入れた。喉に指が食い込み、インプは苦痛に顔を歪ませる。

ドギユン、ドギユン……!

ぶるぶると痙攣する小鬼。その身体が、空気が抜けていく風船の様にしぼみ、縮んでいく。

その光景を、もう一匹のインプが、戦慄の表情を浮かべて見つめていた。

パギヤアアツ!!

「!?!」

炭化した木材の如く生命力を吸い付くされ、碎けて黒塵の粒子と化すインプ。

かのんはなんら憐れむこともなく、無表情に立ち上がる。

「……………くはっ!!」

唇から赤い液体を飛ばしながら、かのんは石畳の上で足を踏みしめた。

「ガルガンチュアの風水使い……………」

血を拭う。

「次は 必ず、殺す」

よろめきつつ、つま先を踏み出す。

「貴様、塞に還るのを手伝え」

「ギッ！」

その言葉に、インプが逆らうことはなかった。

夜の帳は未だ上^{とほ}がらない。

第六章　そして、日常へ

その日、西豪寺邸は、朝の清涼な空気に包まれていた。

ピピピピピ！

甲高い目覚ましの音に、京一は無理矢理に覚醒を強いられた。

その音に、無意識に手が反応し、枕元の時計をバシッと、叩く。

（ん、今日は休みなんだから、もう少し眠らせてくれよ……）

目覚めたものの、頭の中はまだ、はつきりしていない。霧がかかったようにぼんやりする。

彼は寝返りをうとうとした。

ふにつ。

まどろみに再度沈もうとした意識を、二度寝の淵から引き釣りあげたのは、腕に感じた柔らかな感触。

（え！？）

その原因を探るため、目を開けて、顔を動かそうとすると　美しい女性の寝顔が目飛び込んできた。

（ええっ！？）

白いカチューシャの乗った長い髪。

蛾眉たる弧を描く眉。長い睫毛と伏せられた目。

可憐な朱唇。

フリルのついた白のエプロンに、紺色のワンピース。

纖手を顔の前に置いて横たわっている。その白タイツに包まれた足下には、靴を履いていなかった。

すうすうと、可愛い寝息をたてている。

(ええ っ!?)

驚愕の表情で、メイド姿の女性を見つめた。

「な、な、な……、なんで、二階堂さんが……ここに?」

京一は夢かと疑った。しかし。彼女が自分のベッド上で寝ているのは、現実だった。

昨晚の記憶を辿ったが、こうなるような経緯に至るシーンは覚えていない。

「ど、どうなって……いや、どうしよう」

京一は、狼狽した。

××××××××××××

朝日の陽光に輝く、白い日本風水協会のなかでは。

『会長、今朝がた転送された D・H・と戦闘衣の調整を開始しました』

「うむ。できるだけ早い修復を頼む。」

整備部からの報告に、仙狼は答えた。

『了解しました』

通話機越しに、凜とした声が返ってくる。

仙狼は満足そうに頷いた。

彼は、会長室の窓から東京の街並みを眺めた。昨夜、一人の娘が命がけで守った街だ。

「今日ばかりは、敵さんにも休んで欲しいものだな」

辰魅には、ゆっくり休養して欲しい。

「禁忌の“聖宝”がここにある限り、連中は諦めないであろうな」

日本風水協会は表向き、占い師たちの組合のような団体だが、その実、日本を霊的に守護する ガルガンチュア に協力する、組織の一つであった。

悪魔たちとは、敵対する組織だ。

「……」

仙狼は道服から携帯を取り出した。その古風ないでたちとはミスマ

ツチな印象を与えるが、本人は気にした様子もなく、淡々とキーを押していく。

ピッピッパッ……

「もしもし……そろそろあの若者の力を借りる時じゃと思っじゃが……」

老人は、青空を眩しげに見上げながら、話を続けた。

×××××××××××

「あ、あのう」

京一は、そつと女性の肩に手をおいて、揺すってみた。顔に近づくと、髪の手が鼻腔をくすぐる。頭がぼおっとなった。

「え」と、二階堂さん……」

ドキドキしながら声をかけた。その時。

「んんっ」

とさつ　辰魅が寝返りをうつた。
メイドの少女は仰向けになる。

（ぜー！　絶対領域があっー！！）

スカートの裾がまくれあがって、太腿が覗いている。絹製の白タイツに包まれた、すらりとした脚が眩しく映った。

「に、二階堂さん……」

興奮する気持ちを必死に押さえつけて、京一は彼女の覚醒を促す。声をかけながら身体を揺すった。

辰魅の身体の柔らかな感触がメイド服越しに感じられ、どきまぎしてしまふ。

（はたから見たらまるで襲ってる様に見えるのかも……）

「んっ……」

ようやく、辰魅は目覚める気配をみせた。

「あたし……まだ食べられますよぉ……むにゃむにゃ……」

「寝言……」

呆れつつ、

「何の夢を見てるんですか？ それより……起きて」

時計をちらりと見る。

午前七時三十五分。

いつもなら、二人とも朝の準備に忙しい時間帯だ。

「ほら、目を醒ましてください」

「うにゅ？」

うつすらと、瞼を開ける。

ぼやけた視界には、少年の困ったような表情が。

「二階堂さん」

辰魅は、ぱちくりと、瞬^{まはた}いた。

「……」

ベッドに、京一と二人きり。寝転がる辰魅の上に、覆い被さるような形で座る京一。

つまりは

「あ、あの、二階堂さん？」

ちゃんと起きてるのだろうか、不安になる。

「……」

徐々に、頭の中で霧が晴れてくる。

そして。

「きゃああああっ！！！！！！」

バキイイン！！！！！！

渴いた、打音。

「のうごおおおつ！！？」

朝の静けさを破って、少年の盛大な悲鳴が、西豪寺邸に響き渡ったのだった。

××××××××××

「う、ごめんなさいっ！」

朝食の席。

邸の食堂。京一の座るテーブルの上には、目玉焼きやサラダ、トーストなどが並んでいる。カップにコーヒーを注ぎながら、辰魅は何度も謝っていた。

「本当にごめんなさい……」

「もう、いいですよ。気にしてませんから」

辰魅は頬を紅くして、

「あたし、てつきり京一くんが……」

夜這いを仕掛けたのだと、勘違いした。

「京一くんがそんなことするはずなのに……あたしったら……」

泣きそうな辰魅の表情に、京一はドキツとなる。

「でも、どうして僕の部屋に？」

怪訝なのは、それである。

「それは」

とつさに、辰魅はこう、答えていた。

「ね、寝ぼけてたみたい」

「？」

昨夜、遅くまで仕事に追われて、へとへとになった辰魅は、メイド服を着替えず、そのまま自室のベッドに倒れこんだ

「たぶん、おトイレにいった帰りだと思っただけ……」

ボツとした頭で邸を歩いていた彼女は、寝ぼけて京一の部屋に誤って入ってしまったい……泥の様に眠ってしまった次第である。

「はあ、そうなんですか」

まさか、悪魔と戦っていたとも言えず、その場の思いつきでデータラメを口走った。

「しつかり者の辰魅さんが、そんなドジを踏むなんて珍しいですね」

（でも、そういうところも可愛いなあ）

「あの、痛かったでしょ？ それ……」

辰魅は、京一の頬を見た。うつすらとだが、赤い手形がついている。悲鳴と共に思いっきりひっぱたいた跡である。

「いえ、大丈夫ですって！」

心配そうに覗き込む辰魅に、彼は慌てて言った。

「お詫びと言ってはなんだけど……午後にお菓子を焼くから、それで許してくれるかな……？」

「勿論ですよ！」

辰魅の手作りお菓子を食べられる。京一は素直に喜んだ。

ホッとした辰魅は、

「じゃあ、腕によりをかけるから、楽しみにしといてね」

にっこりと、笑って言った。

（やっぱり、辰魅さんには笑顔が一番だな）

辰魅は、笑みのまま、厨房に立ち去っていった。

××××××××××

「辰魅さん、お疲れ様ですう」

メイドさん用の休憩室に、小柄な少女が入ってきて、辰魅に声をかけた。セミロングの髪に、明るい眸ひとみが印象的な、なかなかの美少女である。

「ん、お疲れ」

素っ気なく、辰魅は同僚のメイドさんに返事を返す。彼女はトーストをかじっていた。

この邸のメイドさん達の食事は、厨房の賄い料理で済まされるのが通例である。

「はい、これ」

テーブルに座り込む少女 野中早苗のなか さなえに、辰魅はパンとサラダの入った皿を差し出す。

それから、コーヒポットを手に取って、カップに注ぐ。

「すみません」

おうように謝辞を述べて、早苗はパンを口に運んだ。

「そういえば」

辰魅に、早苗は尋ねた。

「今朝、元気がない様子でしたけど、何かあったんですか？」

ちょうど、京一をぶん殴った後、朝礼の集合場所で顔を合わせた時の事だ。

「ああ……あれね」

京一を叩いたことに、罪悪感を覚えていたので、少々落ち込んでいたのだ。

「……ひょっとして、痴話喧嘩でもしたんですか？ 京一坊っちゃん」と

「！？」

飲み含んだコーヒーを、あやうく噴き出すところだった。

「なんで、あたしがそんなこと」

「でも、辰魅さんと京一坊っちゃんは、らぶらぶな関係だって邸の人達は皆ウワサしてますけど……違いました？」

「どんなガセネタよ……一体、誰がそんな根も葉もないデマを垂れ流してるのよ！？」

怒りの気配をあげる辰魅に、早苗はおっとりした口調で言った。

「えっと、百合菜さんとか、凜さんに、リツさんとか」

「あ、い、っ、らっ！」

同僚たちに、辰魅は柳眉を逆立てた。

「でも、お二人は仲が良いですよねぇ？」

「そりゃあ……京一くんは、まあ、可愛い弟みたいなもんだからね」

少し照れながら、辰魅が言った。

「弟、ですか……？」

「学生の頃からの知り合いだしね、気心はしれてるわね」

「へえ、そんな前から」

「京一くんのお兄さんと同じガツコだったの。それで、ね」

じゃあ、と、早苗は首を傾げて

「その、お兄さんと付き合ってたんですか」

「そんなわけないでしょう」

苦笑して、辰魅が答える。

「彼とは、あくまでただの友達、よ」

そう言った辰魅の瞳に、かすかな揺らぎがあったが……早苗の方は気づかなかったのか、

「はあ、そうなんですか…」

と、得心したように、頷いた。

「そういえば」

と、早苗は話題を変えた。

「制服が新しくなるみたいですよ」

自分のメイド服のリボンを引っ張りながら、早苗が言う。

「そうなの？」

初耳である。

「そう、リツさんに聞きましたよ」

リツさんこと、清水律子^{しみず りつこ}はメイド頭のような立場にある古参のメイドさんである。

「ふうん……」

どんなデザインでしょうかね、と、早苗はわくわくした表情で訊いた。

辰魅も年頃の娘。服の話は嫌いじゃない。

「そうね、もっと可愛いになれば良いんだけど」

「色も紺色じゃなくて、赤とかピンクがいいですねえ」

「それじゃあ、早苗ちゃん、コスプレよ……」

新しい制服は、今日のシフトが終了した後に渡されるらしい。

「へへ…ちょっと、楽しみですよね」

「このお屋敷ではメイドの服でも、良いもの使ってるしね」

一般家庭の家政婦。しかし、日本でも有数の大富豪、西豪寺家である。その家に仕えるメイドさん達のお仕事は、高級ホテルの従業員と大差なく、また待遇もそれらに劣らぬ、破格的なものであった。辰魅達の着ているメイド服も、高級素材を使用したブランド品である。

「さて」

食事を済ませた辰魅は、おもむろに席から立ち上がった。

「寝室のシーツを引っぺがして洗濯場に持っていくから、早苗ちゃん
は後の交換、お願いね」

「はい」

邸では、シーツの交換にあたって、一人が古いのを取りさって、も

う一人が新しいのをセッティングする事になっている。二人一組で仕事をこなすのだ。

「お任せください」

今日は、早苗とコンビで仕事をすませることになる。

××××××××××

穏やかな午後だった。試験に備え、京一は勉強を続けていた。ここは京一の部屋。よく片付けられた、小綺麗な部屋だ。

そこへ

「お坊ちやま、お客さまが見えましたが……」

「客？」

早苗が告げた来客の報せに、京一は訝しげに呟いた。

「一ノ瀬さまにございますが……」

「本当に遊びに来たのか」

昨日、学校で別れ際に交わした会話を思い出し、彼は呻くように言った。

「あのう……」

「まあ、いいや。上がってもらって」

「かしこまりました」

頭を下げ、早苗は部屋の扉を閉めた。

机の上に広げたノートをぱたん、と閉じ、

「全く」

ため息を吐き、そして、毒づいた。

「二階堂さんの作った菓子を、独り占めできるところだったのに……」

それは、嫉妬なのかなんなのか。

悪友とはいえ、もてなさねばなるまい。

西豪寺家の跡継ぎとしては、嫌なやつとはいえ、追い払うわけには
いかないのである。風聞に関わる問題だからだ。

そういえば、初めてだな。

あいつを家に入れるのは。

「ようこそ、と言わなきゃ……」

×××××××××××

「いやあ、相変わらずお前んち広いなあ」

邸の中をキョロキョロ見回して、歩夢あゆむが言った。
はしゃいだ彼の姿を、メイドさん達が珍しそうに、ちらちらと見ていた。

その中に、辰魅の姿はない。

彼女は厨房にいた。

いま、クッキーを焼いている最中である。

「え、お客様が来てるの？」

他のメイドさんに告げられ、驚いた声を上げた。

「じゃあ、もう一人分創らないと」

彼女は急いで生地作りにとりかかった。

そうして。

「あら？ 貴方は……」

「ちわーす！ お邪魔してます」

一ノ瀬 歩夢は、能天気な挨拶をした。
来客用の洋間である。ソファーとテーブル、高そうな調度品の並ぶ、

落ち着いた部屋だ。

「確か、一ノ瀬くんだったよね」

尋ねながら、菓子を盛った盆をテーブルに置く。

盆は二つ。

クッキーとジュースの注がれたグラスが置かれている。

「うひょー、美味そうー！」

焼きたてのクッキーに、歩夢が歓声をあげる。

「おい、一人で全部食べないでくれよ」

京一が注意する。

「？ 盆は二つだけ」

「二階堂さん、ここで休んでいくんでしょう？」

「よくわかったわね。休憩時間だし、一緒に食べようと思ってたところよ」

もう一つの盆は辰魅の分であった。

「勘みたいたものですよ」

京一は謙遜した。

辰魅の行動を日頃から追っている彼にしてみれば、充分予想のでき

る事であつた。

「というわけで、一ノ瀬……みんな食べるんじゃないぞ」

京一は釘を刺した。

歩夢は『わかったよ』と答えたが、食い意地の張つたこの男のことだ。信用ならなかった。

「じゃあ、ご一緒させてもらつわね」

「どうぞ、どうぞ」

辰魅は、薦められるまま、歩夢の隣に座る。

「いただきます」

三人は菓子を頬張つた。

「うおお、美味い！」

クッキーをひとかじりした歩夢が絶賛する。

「ありがとう」

誉められて、辰魅はにっこり笑つた。朝に較べたら機嫌が良い。

「いっぱい焼いたの。たくさん食べてね」

「はい！」

その様子を見ていた京一は、面白くない心境である。
軽い嫉妬を燃やす。

（何だよ、人ん家来て、この図々しい態度は！ しかも二階堂さんとあんなに楽しそうに　！）

京一は、歩夢を邸に入れるのではなかったのだと、後悔した。

「どうしたの？」

険しくなった京一の顔を見た辰魅が、首を傾げて訊いた。

「ひょっとして……美味しくなかった？」

「そんなことないですよ！」

素早くクッキーを口に運ぶ。

「とつても美味しいです！」

「そう、よかった」

安堵して、微笑する辰魅。

「じゃあこれで、今朝の借りは帳消しってことで　」

「はい、これでオツケーです」

「今朝のつて、なんの話だ？」

「まあ、ちょっとした些細な出来事よ」

辰魅は誤魔化すように笑った。

「ふうん……」

ところで、と、歩夢は辰魅に訊ねた。

「二階堂さんは、付き合っている人とかいるんですか」

（いきなり何を聞くんだった!?）

心中で京一が叫ぶ。

「あたし?」

「お姉さんみたいに綺麗な人だったら、彼氏の一人や二人はいるかなあって、思ったんで……」

「あら、お世辞のうまい子ね」

辰魅は、くすぐったそうに、目を細めた。

「今のところ、独り身よ」

「へえ、勿体ないなあ」

「一ノ瀬くんこそ、どうなの?京一くんから聞いたけど、スポーツマンなんだって?」

「いやあ体を動かすことしか、能がないですから、俺は」

朗らかな笑い声。

「コイツみたいな」

と、京一を指し示し、

「優等生と違って、勉強が苦手な性分でしてね」

そう自分を卑下して言ったが、清流館は都内有数の一流校である。偏差値の高いお坊っちゃまお嬢様の通う学校だ。歩夢は他の高校なら充分、成績上位をキープできるだろう。

「そのかわり、部活では引っぱりだこですよ、俺。この前も野球部の代打に呼ばれたし」

「それじゃ、女の子にモテモテでしょう。かっこいいし」

「そんな事ないっすよ」と、照れる歩夢。こんな会話も、京一には面白くなかった。

（一ノ瀬め……）

彼は友人を怨めしく思った。

歩夢と辰魅は、くさる京一をよそに談笑を続ける。

「ねえ、学校の時の京一くんって、どんな感じ？」

「どんな感じ……と言っても……まあ、真面目の化身ですかね」

「化身？」

「そう。真面目に授業受けて、放課後には働き蟻の如く生徒会長の命令を真面目に遂行する」

京一は、授業サボってばかりの君に言われたくないぞ！？と、不満そうに言った。

「部活は真面目だぞ、俺」

「……あのね」

「だいたい」

と、クツキーをかじりながら、

「生徒会の仕事なんてつまんねえもの、よく続けられるな」

「学校の為だろ」

「偉いのね、京一くん」

にこにこ、辰魅が感心の声を上げる。

ふうん、と歩夢はにやにやと笑う。

「ま、あの生徒会長とともに付き合えるのは、清流館広しといえどもお前くらいのもんだろっな」

「失敬なやつだな、君は……」

「どんな子なの、生徒会長さんて？」

興味津々に辰魅が訊いてきた。

「桜留 かのん。三年D組。成績は常に学校トップ。かててくわえて、容姿端麗な完璧美少女」

歩夢が説明する。

「とはいえ、他人に対する態度があまりに厳しくキツイため、ついたあだ名は 氷の女（The Ice Heart）」

非情な人として、周りから畏怖され、親しく付き合う人間は極めて少ない。

「校内でも、あの女の相手が務まるのは」

京一を指差し

「西豪寺くらいしかいないと、学校じゃもっぱらの評判ですよ」

「おい……」

剣呑な声の京一だった。

「へえ」

そうなんだ、と、辰魅は感心した。

「あたしが学生の頃にもいたっけ、そういう娘が」

辰魅は当時のクラスメートだった少女を思い出していた。

その女子生徒はロングの髪に厳めしく眼鏡をかけた優等生であった。絵に描いたような品行方正さで、小姑の如くやかましかったのを記憶している。

……懐かしいなあ。

あたしもあの頃に戻りたい……

辰魅の脳裡に、一人の少年の顔が浮かんだ。

追憶を断ち切ったのは、歩夢の声だった。

「そうそう、付き合ってるって噂もあつたよな」

「先輩と……僕が!？」

愕然とする京一。

「なんで、そんな根も葉もない噂が……」

「だって、傍から見てると『美男美女のお似合いカップル』なんだぜ」

「先輩の耳にそんな噂が入ったら……殺されるよ……」

「京一くんはその娘の事、好きじゃないの？」

辰魅が訊いた。

「そりやそうですよ！ 一人の人間としては尊敬しますけど……」

……そういう感情は一切ありません。僕はただ、生徒会の副会長として、会長である先輩を補佐してるに過ぎないんですから」

「あら……京一くんにも春が来たっ！ って、よろこんだのに……」

それじゃあ、学校で他に好きな人はいないの？ と質問され、京一は「いません！」と否定した。

本当は、いま、目の前にいる貴女の事が好きなんです、なんて告白は口が裂けても言えない……。

悪友がすぐ近くにいた現状では特に。

「高校生なんだから、ちゃんと青春をエンジョイしなきゃ！」

「二階堂さんは、高校の頃、そういう人いたんですか？」

歩夢の問いは、京一をドキリとさせる。

「そうね」

遠い昔を思い出すかのように、辰魅は眸を伏せ、

「……高校生の時ね、片思いだけど　好きな人はいたわよ」

京一の胸になにかが刺さった。

「告白とかは？」

「結局、出来ずじまいで、卒業しちゃった」

ペロツと舌を出し、照れ笑いを浮かべた。

何てやつだ。

京一は、辰魅の心を奪った名も知らぬ相手を呪わずにはいられなかった。

それ程までに彼女に想いを抱かせたその男を憎み殴ってやりたい気持ちになる。

無論、そんな気持ちは面に表すことはなかったが。

その女子生徒はロングの髪に厳めしく眼鏡をかけた優等生であった。絵に描いたような品行方正さで、小姑の如くやかましかったのを記憶している。

……懐かしいなあ。

あたしもあの頃に戻りたい……

辰魅の脳裡に、一人の少年の顔が浮かんだ。追憶を断ち切ったのは、歩夢の声だった。

「そうそう、付き合ってるって噂もあったよな」

「先輩と……僕が!？」

愕然とする京一。

「なんで、そんな根も葉もない噂が……」

「だって、傍から見ると『美男美女のお似合いカップル』なんだから」

「先輩の耳にそんな噂が入ったら……殺されるよ……」

「京一くんはその娘の事、好きじゃないの？」

辰魅が訊いた。

「そりやそうですよ！ 一人の人間としては尊敬しますけど……そういう感情は一切ありません。僕はただ、生徒会の副会長として、会長である先輩を補佐してるに過ぎないんですから」

「あら……京一くんにも春が来たっ！ って、^{よろこ}んだのに……」

それじゃあ、学校で他に好きな人はいないの？ と質問され、京一は「いません!」と否定した。

本当は、いま、目の前にいる貴女の事が好きなんです、なんて告白は口が裂けても言えない……。

悪友がすぐ近くにいる現状では特に。

「高校生なんだから、ちゃんと青春をエンジョイしなきゃ！」

「二階堂さんは、高校の頃、そういう人いたんですか？」

歩夢の問いは、京一をドキリとさせる。

「そうね」

遠い昔を思い出すかのように、辰魅は眸を伏せ、

「……高校生の時ね、片思いだけど 好きな人はいたわよ」

京一の胸になにかが刺さった。

「告白とかは？」

「結局、出来ずじまいで、卒業しちゃった」

ペロツと舌を出し、照れ笑いを浮かべた。

何てやつだ。

京一は、辰魅の心を奪った名も知らぬ相手を呪わずにはいられなかった。

それ程までに彼女に想いを抱かせたその男を憎み殴ってやりたい気持ちになる。

無論、そんな気持ちは面に表すことはなかったが。

やがて、歓談の時は瞬く間に過ぎ去り、外から烏の鳴き声が淋しく響いてきた。

「もう、こんな時間か」

京一の部屋でゲームを楽しんでいた歩夢は、窓の外を見やって、呟いた。

窓から覗く風景は、すっかり紅に染まっている。

「帰るなら、送っていくよ」

「別に一人でもいいけど……お前がどうしてもって言うんなら、構わないぜ」

「……」

なんとなく、切れない気分の京一であった。

話ながら廊下を歩き、二人は西豪寺邸の広い玄関に出た。

「またのお越しをお待ちしております」

玄関にいたメイドさんが、ペコリとお辞儀して見送ってきた。歩夢はもちろん、と親指を立てる。

ため息を吐く京一。

街は、茜色の雲に染まって静かに佇^{たたず}んでいた。

「よし！ 決めた」

「なんだい、突然」

歩夢は不敵に笑みを浮かべた。

「俺、二階堂さんを落としてやる！」

「……は？」

「あの人、俺の彼女にする」

「無理だろ、君みたいな奴に二階堂さんが……」

「やってみなくちゃ、わかんねえだろ！？」

びしいっ！ と、指を突き付け

「俺のラヴ・アタック攻撃で、絶対に振り向かせてみせる！！」

（だから無理だって）

「……アタックも攻撃も同じ意味だし」

「どうでもいい。とにかく、俺はあの人を恋人にすると決めたんだ。だから、またお前んとこに」

「そんな理由で何度も僕の家に来るつもりかい！？」

「だって会えねーじゃん」

会わんでいい!!

「今日はご馳走になったから、今度はケーキでも土産に持ってくな」
朗らかに宣う歩夢に、京一はため息を吐いた。

「いらないって」

「ま、ともかくお前も協力しろよ、友達なんだからな」

いいや

「……」

今日から君は……敵だよ。

京一は声なき声で、恋のライバルに叫んだのだった。

××××××××××

さて、その翌日の朝。京一の部屋で。

「じゃ〜ん!!」

くるり、と辰魅が軽やかに回ると、ふわりとスカートが風を受けて広がった。

「二階堂さん？」

目覚めたばかりの京一は、メイド服姿の女性の振る舞いに、眼をぱちくりとさせた。

「どう？　新しい制服よ、似合う……かな？」

そういえば、昨日とは服のデザインが違っている事に京一は気付いた。

全体的にふんわりと、柔らかい雰囲気になっている。

夏の空の様に明るい、鮮やかなスカイブルーのワンピースに、愛らしい水色のフリルの取り巻いた、プルーフホワイトのエプロン。カチューシャは少し小さめに変わっている。

胸元のリボンも、スカーフになっていた。足に履くタイツやニーソックスは各人の自由なのだが、辰魅は紺色のニーソックスを履いている。

なんとなく、気品と優雅さが増したような観のある新メイド服であった。

「素敵……ですね」

うっとりとして、京一は本心から言った。

「ありがと」

辰魅は照れ笑いを浮かべた。

「あ、そーだ」

エプロンのお腹には、まるで某猫型ロボットのそれを思わせる大きなポケットがついていて、その中に辰魅は手をつ込み、ガサゴソと探っていた。

（ドラ もん…？）

やっぱり人気ロボットの姿を連想させるものがあつた。

「これこれ」

パツと、紙の様な物を彼女は取り出した。

チケットだ。

「ねえ、京一くん。カラオケ行かない？」

と、辰魅からのお誘いである。

見れば、カラオケ店の無料チケットらしかった。指の間に挟んでピラピラさせている。

「勉強ばかりしてないで、たまには遊んで息抜きしましょうよ」

これが、歩夢あたりに言われていたら、恐らく反発して断っていただろう。

だが、相手は辰魅である。

「そうですね、良いですよ」

にへら、と笑って頷いた。

「早苗ちゃんとか凜さんとかも誘って、皆でパーツと騒ぎましょ」

え……と、京一の顔色が変わった。

二人つきりじゃないの？

これはガツクリきた。

「い、いや。あんまり騒がしいのは……、その大勢で行くつても好きじゃないし……」

「

しどろもどろ。

「どうせなら……その……に、二階堂さんと二人で……」

「なに？ 一人で行きたいの？」

京一の声は小さくて辰魅には聞こえなかったようだった。

小首を傾げる辰魅に、

「あのう、じゃなくて、二階堂さんと一緒に行きたい……です！」

××××××××××

京一が勇気を振り絞って辰魅に告げてから、約一週間後。

その日、試験も終わり、京一は早めに帰宅している。

辰魅と出掛けるには、彼女が今日のシフトを終わらせてからでないと無理なので、京一は時間を潰すのに腐心した。

夕方、京一は先に家を出て、待ち合わせの駅前通りに向かった。

澄んだ空にゆっくり雲が流れ、夕陽が雲に反射して桃色に輝くのが目に眩しい。

京一は商店街の片隅に立ち、そわそわと周りを見回している。

（早く来ないかな）

どきどきしていた。時計を見る。午後五時十分。辰魅はもう仕事を終えただろうか。

ちなみに、彼はわざわざ新品と思われるおろしたての服を着て、髪も入念にセットしていた。

完全にデート気分である。

そんな彼に、近づく人影の姿があった。

「あら？」

女の声。その声の方に咄嗟とっさに振り向いていた。

「先輩……！」

「やっぱり、西豪寺君ではないですか」

少し、驚いた^{かお}貌で長い黒髪の少女　　桜留かのんが立っていた。
かのんは当然というか、私服だった。

黒のワンピースに、茶色のロングスカート。革の靴。質素で落ちついた雰囲気をもとっていて、学校の時より大人びて見える。

「お買い物……ですかしら？」

首を傾げて尋ねた。

「ええっと、人と待ち合わせを……」

「まあ」

京一には何人かの友人がいたことに、かのんは思い当たった。
友人と遊ぶ約束でもしてたのだろうか。彼もやはり、年頃の少年なんだな、と思った。

（せっかく、出逢えたんですもの、もう少し、お話を……）

かのんは迷った。　そこへ

「お待たせ〜！」

明るい呼びかけと共に、京一の元に駆けってくる一人の女性。
かのんはハッとする。

（　　！　　）

瞳目は一瞬。

「二階堂さん!!」

京一の声が嬉しそうに跳ね上がった。

二十歳くらいの綺麗な顔立ちの女性であった。かのんには見覚えのある顔

辰魅の格好は、いつものメイド服ではなく、私服。

白いシャツに赤のミニスカート、髪はリボンでポニーテールに結んでいる。手には、ハンドバッグ。靴はヒールだ。
京一は新鮮な気持ちを覚えた。

「遅れてゴメン……お化粧にてまどっちゃって」

そつえば、唇には紅が塗ってあった。

「……ん？」

辰魅は京一の傍にいた少女に目を向けた。

「あ……」

目が大きく見開かれ　その目をかのんはジッと見返した。

「……!」

あの時の　二人の思いは同じ。

『この子は？』

『この人は？』

同時に二人の口から質問がこぼれた。

「え〜と……しよ、紹介するよ、ウチの学校の先輩で……」

「桜留かのんです」

はつきりとした声音で、かのんが名乗る。

「すると、貴女が噂の生徒会長さん？」

「噂……？」

どういふ事かと、無言で京一に問いかける。

「い、いや、それは一ノ瀬の奴が勝手に……」

慌てる京一だったが、かのんは深く追求しなかった。

「それで、ね。この人は」

「二階堂 辰魅よ。彼のお屋敷で働いてるの」

言いながら、軽くお辞儀をする。板についた動作だった。

「はじめまして、と、言うべきかしらね」

辰魅はそう言って、手をかのんに差し出す。

「
ですわね」

「よろしくね、かのんちゃん」

かのんはそつと、辰魅の手を握り返した。

「こちらこそ……」

「かのんちゃん、手、怪我してるの？」

かのんの手には包帯が巻かれていた。

「そういえば先輩、火傷したって」

心配そうに京一が言った。

「大丈夫ですわ、西豪寺くん」

彼女は微笑して、答えた。

苦痛に感じている様子ではないので、京一は安堵の息を吐いた。

その白い包帯にくるまれたかのんの手を、辰魅が凝視していた。

「……心配してくれてありがとう」

かのんは、はにかんだように呟いた。

「何言ってるんです。同じ生徒会の仲間でしょう。それに僕は副会

長です。会長が怪我をしているのだから、心配もしますよ」

「でも、もうほとんど治ってますわ。これから病院に向かう所でしたの」

その途中で京一を見かけ、声をかけた。

「それにしても、料理で火傷なんて……先輩にしては珍しいドジですね」

京一は学校でそのように聞いていた。

「学校のみなさんに言いふらさないでくださいましね。会長の威厳が損なわれますから」

照れ隠しの笑みと共にかのんは言った。

「解ってますよ」

京一は請け負った。嘘は言わない男だ。

「仲、良いんだね」

二人の様子を見た辰魅は、ニヤニヤとしていた。かのんはちょっとだけ赤くなる。

（この子）

その姿を見て、彼女は確信した。

（なるほど、ね）

「お二人はその、どういう関係で……？」

かのんは聞くのを躊躇っていた質問を試みた。気になっていたのだ。

「あたしは京一くんのお父様に雇われてるだけ、ただのお手伝いよ。まあ、こうして時々一緒に遊びに出掛けるけど、ただの友達」

その言葉を聞いた京一が、残念そうな表情を浮かべたのを、かのんは見逃さなかった。

「だから安心して、かのんちゃん」

パチリ、と、ウィンク。

「安心？」

「べ、別に私は……」

かのんは顔を背けた。

辰魅はふふっと、笑って

「京一くんも幸せよね。こんな美人の会長さんの元で働けるんだもん」

「生徒会の仕事って、そんなに気軽でも愉快的なものでもないですよ」

あくまで真面目に、京一は言った。

「ですよ、先輩」

「ええ、そうですわね」

やや寂しい響きが混ざっていた。

「ねえ、手は大丈夫なんだよね」

「はい。診てくださる医者様が腕の良い方で……」

辰魅は『良かったね』と、言った。

「本当にね……」

辰魅の瞳には、別の感情が浮かんでいる。

（この子は敵）

「あの、お二人は何か用事で？」

「そうだった」

ぴらぴらと券を取り出し

「カラオケに、ね。試験も終わった事だし。息抜きを兼ねて遊ぼう
って」

「それは楽しそうですわね」

と言つかのん自身はカラオケなど行ったことがない。遊ぶ事そのものを知らないのだ。

（倒すべき相手）

かのんは、辰魅の顔を正面から見つめた。彼女から見ても、美しい女性だった。

辰魅は『ん？』という表情で小首を傾げる。かのんの頬が僅かに桜色に染まった。

「二階堂さん、そろそろ」

「行きましょうか」

辰魅は時計を一瞥して頷いた。

辰魅はかのんに、微笑を向ける。

「じゃあね、かのんちゃん」

「はい」

二人の娘の視線が合った。宙空でそれはぶつかり合い、絡まり合って見えない雷光を生じせしめる。

「これからも京一くんをよろしくね。まあ頼りない子だけど」

京一は不満そうな表情を浮かべたが、無視。

「いいえ、彼にはいつも助けてもらってますわ。私にとっては優秀な補佐役ですの」

かのんは苦笑。

「では、私も行かなくてはなりませんので」

失礼します、と述べて、かのんはクルリと、きびす踵を反した。かえ

「京一くん、あたし達も」

「はい！　じゃあ先輩、また学校で」

やっと二人つきりに……京一の胸は高鳴った。

辰魅は無言で、立ち去るかのんに視線を走らせた。

かのんは振り向き、手を振ってくれた。

かのんは辰魅を見た。

「……」

辰魅は頷いた。かのんも頷き返した。どちらも不適な笑みを唇に刻んで

声なき声で。　意思が放たれる。

次に相見える時には、私が勝つのだ、と。

（望むところ……）

それは、静かにして激烈な、宣戦布告だった。

雑踏のなか、かのんの姿が消えていく。

夕陽の色が、再び流される血の色を象徴するかのように、紅く輝いていた。

終章

その日。一人の男が、新成田空港に降り立った。ひしめく雑踏のなか、男は荷物を手に悠然と辺りを見渡した。長身だ。短い黒髪に、灰色のスーツを纏っている。サングラスの為に表情は判りづらいが、口元には笑みが刻んであった。

「三年ぶりか……日本は」

低く、呟いた。

「ここが貴方の故郷なのね」

背後から投げかけられた、柔らかな声。

「ああ、そうだ」

男は振り向いた。

「ここが俺の故郷。邪霊の五月蠅^{ほた}えなす国　日本さ」

ごん。

男が腕を動かすと、手にしていた荷物が、地面に当たって鈍く音をたてた。黒い大きな革製のケース

「迎えが来るって言ってたよね？」

「そう、連絡で聞いているが……」

後ろからの質問に、男は頷いて答えた。

「じゃあ待っていていよう。貴方のご家族の方が、迎えに来るまで」

××××××××××

その頃。

地下深く設けられた風水の砦では

『H・D・全修復及び全換装終了』

オペレーター達の声が慌ただしく技術開発室（通称・T・D・U・
R）内に^{こたえ}返す。

『霊的サーキット、RON形式にてDOM化、第二記憶媒体にDL・
キー^{キー}保存します』

『よし。作業が済み次第、会長に報告を入れる』

『報告書を纏めて速やかに提出します』

『それと、ついでに新しい術式の追加DLも頼む』

『了解』

『全てが完了する二時間後に、 鱗核 を起動するぞ』

『了解しました』

水晶色の龍頭は静かに覚醒の時を待っていた。

戦闘で破損、疲弊した箇所は、今やフル・チューンアップされ、美しい輝きを取り戻している。
主の手に握られるまで、それは眠りにつく。しかし、目覚めの日も近いだろう。

そんな予感が誰しもあった。

『 鱗核 起動！』

う ゝん 灯が点る。

おうううううん……甲高い咆哮が響いた。

戦いを呼ぶ龍の声。

新たな戦陣へ主を導く、それは第一楽章の始まりを告げるファンファーレ。

二階堂 辰魅に試練の時が迫っていた。

……この国の、いや、世界の未来を賭けた、大いなる戦いの試練の時が。

風水メイド神記

第一部・青龍の杖編

完

GREEN版 あとがき

GREEN版 あとがき

この、萌え系伝奇アクション(?)もようやく第一部を終わらせられる事ができました。無論、書ききれなかった部分や修正すべき箇所は山ほどありますが、まあ、こんなへっぽこな作者の力量なんてたかがしれているので、『こんなもんだな』と、大目に見てやってください(笑)

さてさて、第二部ですが、いつ起筆するかは作者本人にも不明です(笑)

ちよつとだけ物語について述べると、第二部はよりスケールが大きくなる……はずです新キャラも増える予定で、戦いはよりハードにヒートアップすると思います。

第三部は現在構想途中の ガルガンチュア 五部作のクライマックス、完結編となります。最終決戦で全ての運命に決着が着く物語となるでしょう。まだ、執筆するのはだいぶ先でしょうが……。

それでは、第二部 煌天の聖剣編 でお会いできる日まで しーゆーあげいん

(作者)

(当時の文章をそのまま再録しました。 作者)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2543m/>

風水メイド神記 第一部 青龍の杖編

2010年10月14日19時57分発行